



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報 告 書 2018

2019 年 3 月

F D 部会

目 次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1. 1 委員の構成	1
1. 2 事業の実施状況	1
1. 2. 1 授業評価	1
1. 2. 2 授業公開	12
1. 2. 3 F D 研修	12
1. 2. 4 実施要項	13
2. 各部局のF D活動	
2. 1 経済学部	
2. 1. 1 授業評価アンケート	14
2. 1. 2 授業公開	14
2. 1. 3 部局内F D教員懇談会	16
2. 1. 4 授業改善についての課題と展望	17
2. 2 生物資源学部	
2. 2. 1 授業評価	18
2. 2. 2 授業公開の方針と実績	18
2. 2. 3 授業改善の取り組み	18
2. 2. 4 授業改善についての課題と展望	20
2. 3 海洋生物資源学部	
2. 3. 1 授業評価	21
2. 3. 2 授業公開の方針と実績	21
2. 3. 3 F D 研修への参加	22
2. 3. 4 授業改善についての課題と展望	22
2. 3. 5 F レックスLMS 講習会	25
2. 4 看護福祉学部	
2. 4. 1 授業評価	26
2. 4. 2 授業公開	28
2. 4. 3 授業改善への取り組み	28
2. 4. 4 F D 研修	30
2. 4. 5 授業改善についての課題と展望	37
2. 5 学術教養センター	
2. 5. 1 授業評価アンケートの結果	39
2. 5. 2 授業公開の方針と実績	39
2. 5. 3 部局内F D研修	40
2. 5. 4 授業改善についての課題と展望	41

はじめに

福井県立大学における FD 活動は、2003 年に始まり、特に公立大学法人に移行した 2007 年からは「教育・学習支援チーム」として再編され、さらに 2018 年度は、学内委員会等の見直しの影響を受けて「FD 部会」となりました。しかし、活動の内容は、授業評価、フレックスも含めた各種研修会への参加、部局での公開授業や検討会などが継続して取り組まれており、その内容は本報告書に掲載されているとおりです。

そもそも FD とは、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる」（中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申、2005 年 17 年 1 月など）と定義されており、本学における FD 活動も、この定義をある程度念頭に置きながら取り組まれてきたと考えられます。ただし、これまでの報告書においても指摘されてきたように、毎年行われる活動が粛々と進められていることから、その重要性は決して否定しないものの、活動の定型化・マンネリ化、実効性に対する疑問、関係者の負担感などが指摘されているところです。

言うまでもなく、大学教員は自律した教育・研究者です。FD 活動の目的は、定型的にせよ毎年行われる活動の一つの手がかりとして、まずは教員一人ひとりが授業を見つめ直す機会として位置づけ、学生の反応も窺いながら、より良い授業改善に結びつけていくことが必要でしょう。そのうえで、一人で考えることの限界を克服するために、授業公開も含めて他の教員との情報交流を進めること、あるいは外部の研修会等に参加することにより、さまざまな気づきを得ることが重要になると考えられます。

この点に関連して、昨年（2018 年）12 月に FD とは異なる活動ですが、本学の英語教育のあり方をめぐって教育研究委員会主催による教育研究フォーラムが開催されました。このフォーラムは、学術教養センターと各学部の教員がパネリストとして登壇し、一般教育の英語授業を中心に意見交換を行うという初めての試みで、本学の学生実態を客観的に明らかにし、英語教育の枠組みを超えて専門科目も含めた授業のあり方についていろいろな示唆が与えられたと感じています。FD とは、決して授業に関する技法を修得することだけが目的ではないはずです。大学や各部局が掲げる教育理念、それを具体的に実現していくための制度としくみ（カリキュラム）とリンクさせて考えることが、少々遠回りであっても、長い目で見れば重要であると考えます。

最後に、この 1 年間慣れない委員長を支えてくださった部会メンバーの皆さん、適切なアドバイスをいただいた学術教養センターの山川教授と徳野教授、ならびに授業評価アンケートの遂行や本報告書の整理・編集、会議の準備と後始末など、他の業務も抱えながら尽力いただいた教育推進課の福岡主任に深く感謝いたします。

2019 年 3 月

2018 年度 FD 部会 委員長 北川 太一

1. 活動概要

1.1 委員の構成

2018 年度の F D 部会メンバーは、以下の 6 名の教員である。

2018 年度 F D 部会委員名簿

氏 名	所 属	職	役 割
北 川 太 一	経済学部	教 授	委 員 長
山 崎 淳	経済学部	准 教 授	委 員
伊 藤 崇 志	生物資源学部	准 教 授	委 員
田 原 大 輔	海洋生物資源学部	准 教 授	委 員
北 明 美	看護福祉学部	教 授	委 員
加 藤 ま ど か	学術教養センター	准 教 授	委 員

1.2 事業の実施状況

1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果、経年特性（前期、後期）を次頁より順に掲載する。

平成30年度 学生による授業評価の実施結果

（前期）実施期間 平成30年7月10日（火）～7月26日（木）

調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,819 枚	4,916 枚
生物資源学部	710 枚	889 枚
海洋生物資源学部	912 枚	1,149 枚
看護福祉学部	1,877 枚	2,685 枚
学術教養センター	4,306 枚	6,263 枚
キャリアセンター	0 枚	0 枚
計	10,624 枚	15,902 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	33 枚	43 枚
生物資源学研究科	86 枚	130 枚
看護福祉学研究科	35 枚	65 枚
計	154 枚	238 枚

参加教員

＜学部＞	実施人数	実施率
経済学部	28 人	100.00 %
生物資源学部	14 人	93.33 %
海洋生物資源学部	15 人	93.75 %
看護福祉学部	27 人	93.10 %
学術教養センター	24 人	96.00 %
キャリアセンター他	2 人	100.00 %
非常勤講師	49 人	92.45 %
計	159 人	94.64 %

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	5 人	71.43 %
生物資源学研究科	7 人	77.78 %
看護福祉学研究科	9 人	56.25 %
キャリアセンター他	1 人	100.00 %
非常勤講師	1 人	16.67 %
計	23 人	58.97 %

参加科目

＜学部＞	実施科目	実施率
経済学部	54 科目	96.43 %
生物資源学部	22 科目	100.00 %
海洋生物資源学部	20 科目	90.91 %
看護福祉学部	45 科目	69.23 %
学術教養センター	143 科目	85.12 %
計	284 科目	85.29 %

＜大学院＞		実施率
経済・経営学研究科	6 科目	60.00 %
生物資源学研究科	9 科目	64.29 %
看護福祉学研究科	9 科目	37.50 %
計	24 科目	50.00 %

（後期）実施期間 平成31年1月17日（木）～1月31日（木）

調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,433 枚	5,024 枚
生物資源学部	449 枚	946 枚
海洋生物資源学部	673 枚	985 枚
看護福祉学部	1,653 枚	2,432 枚
学術教養センター	3,693 枚	5,740 枚
キャリアセンター	0 枚	0 枚
計	8,901 枚	15,127 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	51 枚	66 枚
生物資源学研究科	67 枚	114 枚
看護福祉学研究科	28 枚	60 枚
計	146 枚	240 枚

参加教員

＜学部＞	実施人数	実施率
経済学部	28 人	93.33 %
生物資源学部	16 人	76.19 %
海洋生物資源学部	13 人	100.00 %
看護福祉学部	23 人	82.14 %
学術教養センター	23 人	95.83 %
キャリアセンター他	4 人	80.00 %
非常勤講師	44 人	74.58 %
計	151 人	83.89 %

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	8 人	66.67 %
生物資源学研究科	6 人	85.71 %
看護福祉学研究科	7 人	46.67 %
海洋生物資源学専攻	2 人	33.33 %
キャリアセンター他	2 人	100.00 %
非常勤講師	1 人	25.00 %
計	26 人	56.52 %

参加科目

＜学部＞	実施科目	実施率
経済学部	89 科目	76.07 %
生物資源学部	17 科目	62.96 %
海洋生物資源学部	19 科目	70.37 %
看護福祉学部	44 科目	67.69 %
学術教養センター	141 科目	83.43 %
キャリア教育科目	0 科目	0.00 %
計	310 科目	76.54 %

＜大学院＞		実施率
経済・経営学研究科	12 科目	70.59 %
生物資源学研究科	10 科目	52.63 %
看護福祉学研究科	9 科目	40.91 %
計	31 科目	53.45 %



福井県立大学 授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために
行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

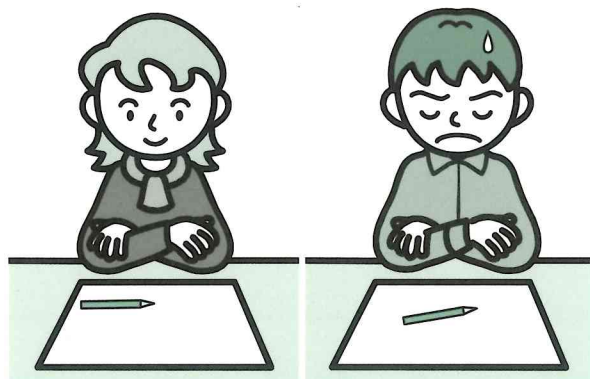
回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述
してください。

記入上の注意

- 1：選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述
してください。
- 2：記入は濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
- 3：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 4：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例) 良い例 (2) ... ▶ ● 悪い例 (2) ... ▶ ~~(2)~~ ~~(3)~~ ~~(4)~~ ~~(2)~~



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学
ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を
御覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 2018年入学生・・・①

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 2018年入学生・・・⑧

学部生 所属の番号をマークしてください。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科 4: 海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5: 看護福祉学部看護学科 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8: 経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻 9: 経済・経営学研究科 経営学専攻 10: 生物資源学研究科 生物資源学専攻
11: 生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻 12: 看護福祉学研究科 看護学専攻 13: 看護福祉学研究科 社会福祉学専攻 14: 科目等履修生・聴講生

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭

質問および回答欄

Q1 この授業(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか?

1. 意欲的に取り組まなかった 2. あまり意欲的に取り組まなかった 3. ある程度意欲的に取り組んだ 4. 意欲的に取り組んだ

① ② ③ ④

Q2 先生の講義の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用)はどうでしたか?

1. 不適切 2. やや不適切 3. まずまず適切 4. 適切

① ② ③ ④

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか?

1. 理解できなかった 2. あまり理解できなかった 3. ある程度理解できた 4. 理解できた

① ② ③ ④

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか?

1. 高まらなかった 2. あまり高まらなかった 3. 少し高まった 4. 高まった

① ② ③ ④

Q5 この授業を総合的に評価してください。

1. 良くない 2. あまり良くない 3. まずまず良い 4. 良い

① ② ③ ④

Q6 授業を受けた上での感想(先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、など)を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します。

Q6 の自由記述欄

Q7 教員設定の質問(別紙参照)

① ② ③ ④

Q8 教員設定の質問(別紙参照)

Q8 の自由記述欄

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。以下に、集計結果の見方を記す。

集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問は、回答選択肢「1, 2, 3, 4」をそれぞれ「1 点, 2 点, 3 点, 4 点」と得点化、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。無回答の場合の人数は母集団に含めず。「―」の欄は有効回答が無かったことを示す。

〔集計グループ〕

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え、学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

平成30年度 前期 学生による授業評価全体集計結果 (学部生)

集計グループ (集計数)		Q1意欲の受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体 (10252)		3.31 0.68	3.39 0.68	3.23 0.69	3.25 0.74	3.40 0.65
学部学科別 (10252)						
経済学部 (5005)		3.29 0.70	3.36 0.71	3.20 0.72	3.21 0.76	3.38 0.67
	経済学科 (2467)	3.28 0.70	3.36 0.70	3.19 0.71	3.20 0.75	3.37 0.66
	経営学科 (2538)	3.29 0.71	3.37 0.71	3.21 0.73	3.21 0.77	3.38 0.69
生物資源学部 (1250)		3.29 0.65	3.39 0.66	3.22 0.70	3.26 0.71	3.41 0.64
	生物資源学科 (1250)	3.29 0.65	3.39 0.66	3.22 0.70	3.26 0.71	3.41 0.64
海洋生物資源学部 (1428)		3.24 0.72	3.39 0.69	3.24 0.70	3.23 0.77	3.40 0.66
	海洋生物資源学科 (1428)	3.24 0.72	3.39 0.69	3.24 0.70	3.23 0.77	3.40 0.66
看護福祉学部 (2538)		3.39 0.63	3.45 0.61	3.28 0.64	3.33 0.68	3.45 0.61
	看護学科 (1633)	3.43 0.62	3.45 0.62	3.29 0.63	3.34 0.69	3.44 0.61
	社会福祉学科 (905)	3.32 0.63	3.44 0.60	3.25 0.64	3.30 0.68	3.46 0.60
科目等履修生・聴講生 (31)		3.39 0.70	3.77 0.42	3.45 0.61	3.61 0.49	3.77 0.42
入学年次別 (10252)						
1 1 生 (3)		3.00 0.82	3.00 0.82	3.67 0.47	2.67 0.94	3.00 0.82
1 2 生 (33)		3.12 0.69	3.30 0.80	3.21 0.64	3.18 0.72	3.30 0.72
1 3 生 (46)		3.28 0.54	3.17 0.73	3.13 0.45	3.09 0.65	3.26 0.71
1 4 生 (34)		3.35 0.72	3.24 0.91	3.32 0.72	3.41 0.69	3.41 0.73
1 5 生 (324)		3.13 0.61	3.31 0.65	3.15 0.62	3.16 0.68	3.30 0.64
1 6 生 (2426)		3.26 0.68	3.32 0.69	3.20 0.70	3.23 0.74	3.34 0.66
1 7 生 (3156)		3.28 0.70	3.35 0.70	3.21 0.71	3.24 0.75	3.37 0.67
1 8 生 (4230)		3.36 0.67	3.47 0.64	3.26 0.69	3.27 0.74	3.47 0.63
部局別 (10252)						
経済学部 (2698)		3.26 0.70	3.29 0.74	3.13 0.73	3.15 0.76	3.30 0.69
生物資源学部 (682)		3.25 0.64	3.31 0.67	3.15 0.72	3.22 0.71	3.33 0.66
海洋生物資源学部 (880)		3.23 0.73	3.33 0.71	3.18 0.72	3.21 0.79	3.35 0.68
看護福祉学部 (1810)		3.37 0.64	3.40 0.64	3.24 0.65	3.32 0.69	3.40 0.63
学術教養センター (4182)		3.34 0.68	3.48 0.63	3.31 0.67	3.29 0.73	3.49 0.61
規模別 (10252)						
1 0 0 人以上 (5082)		3.26 0.69	3.30 0.70	3.14 0.71	3.18 0.75	3.31 0.67
1 0 0 人未満 (5170)		3.36 0.67	3.48 0.63	3.31 0.66	3.31 0.72	3.49 0.62

平成30年度 前期 学生による授業評価全体集計結果 (大学院生)

集計グループ	(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	(152)	3.47 0.60	3.57 0.57	3.30 0.64	3.53 0.58	3.59 0.53
研究科専攻別	(207)					
経済・経営学研究科	(75)	3.47 0.61	3.44 0.66	3.25 0.61	3.53 0.61	3.59 0.65
地域・国際経済政策専攻	(61)	4.00 0.00	3.50 0.76	3.50 0.50	3.67 0.75	3.67 0.75
経営学専攻	(14)	3.14 0.64	3.36 0.72	3.00 0.65	3.36 0.61	3.50 0.73
生物資源学研究科	(98)	3.30 0.59	3.47 0.56	3.19 0.64	3.36 0.59	3.48 0.50
生物資源学専攻	(82)	3.39 0.56	3.50 0.57	3.22 0.64	3.45 0.57	3.56 0.50
海洋生物資源学専攻	(16)	3.06 0.66	3.31 0.46	3.19 0.53	3.13 0.60	3.19 0.39
看護福祉学研究科	(34)	3.88 0.32	3.94 0.24	3.62 0.54	3.94 0.24	3.88 0.32
看護学専攻	(25)	3.88 0.32	3.96 0.20	3.60 0.57	3.96 0.20	3.88 0.32
社会福祉学専攻	(9)	3.89 0.31	3.89 0.31	3.67 0.47	3.89 0.31	3.89 0.31
科目等履修生・聴講生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別	(152)					
1 1 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 2 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 3 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 4 生	(2)	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
1 5 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 6 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 7 生	(15)	3.13 0.72	3.13 0.72	3.00 0.63	3.20 0.75	3.27 0.77
1 8 生	(135)	3.50 0.57	3.61 0.53	3.32 0.63	3.56 0.55	3.62 0.48
部局別	(152)					
経済・経営学研究科	(32)	3.47 0.61	3.44 0.66	3.25 0.61	3.53 0.61	3.59 0.65
生物資源学研究科	(86)	3.30 0.59	3.47 0.56	3.19 0.64	3.36 0.59	3.48 0.50
看護福祉学研究科	(34)	3.88 0.32	3.94 0.24	3.62 0.54	3.94 0.24	3.88 0.32

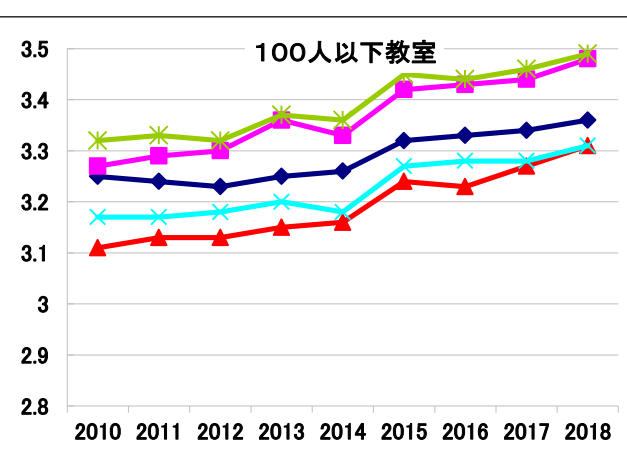
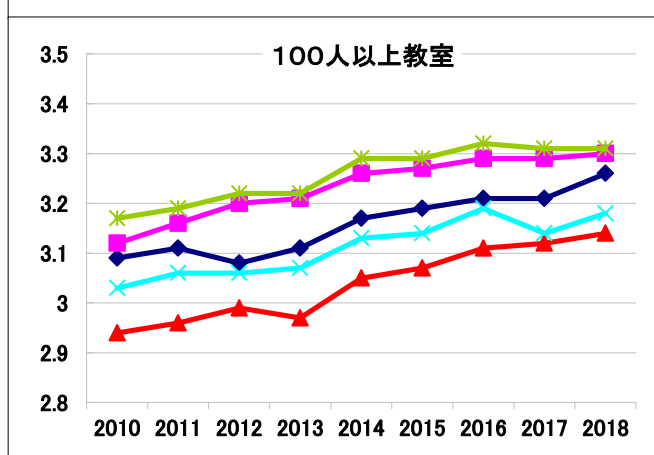
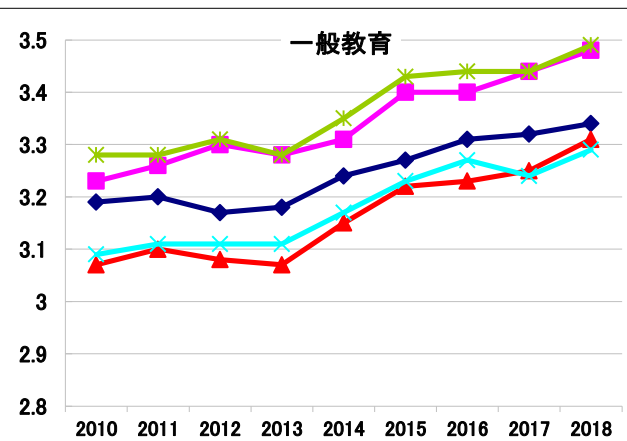
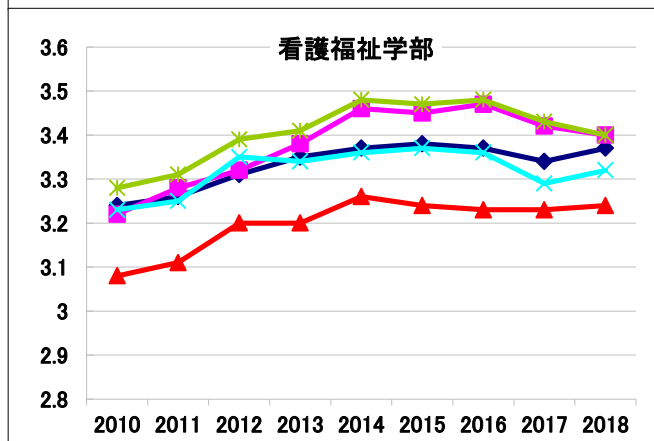
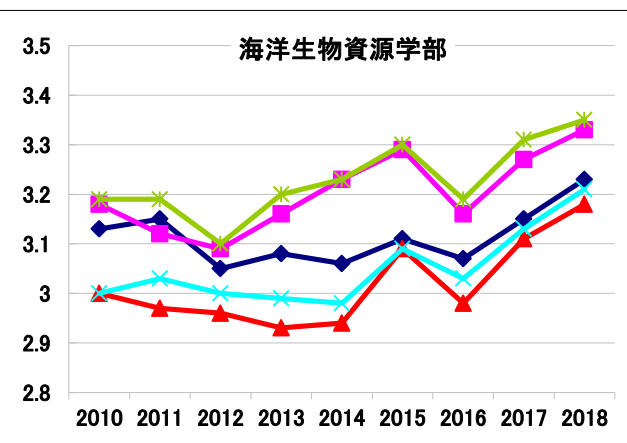
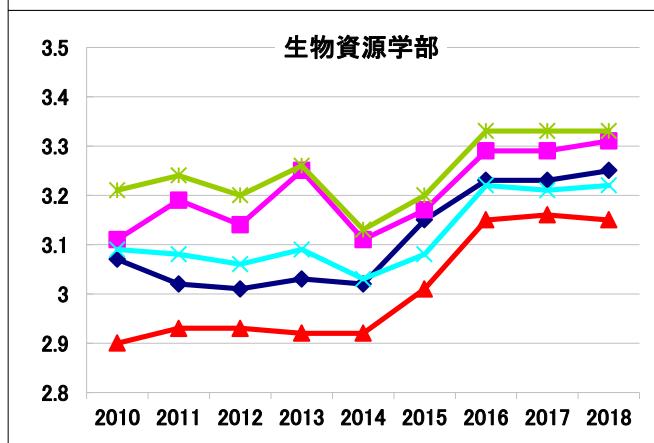
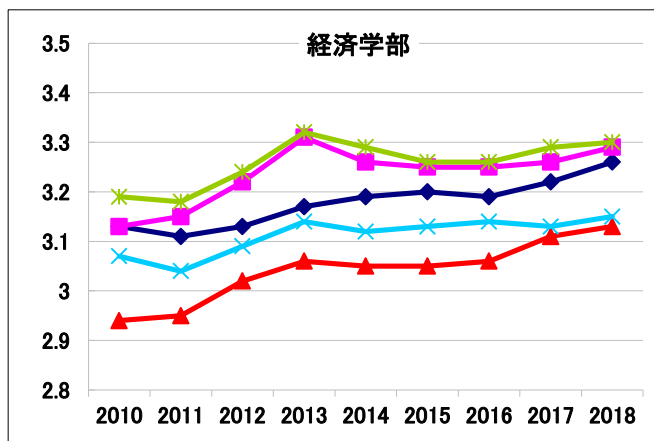
平成30年度 後期 学生による授業評価全体集計結果 (学部生)

集計グループ (集計数)		Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体 (8624)		3.33 0.68	3.41 0.67	3.24 0.70	3.26 0.75	3.43 0.65
学部学科別 (8624)						
経済学部 (4225)		3.32 0.68	3.40 0.68	3.22 0.70	3.25 0.74	3.44 0.64
	経済学科 (2093)	3.27 0.68	3.37 0.69	3.20 0.70	3.22 0.74	3.41 0.65
	経営学科 (2132)	3.36 0.68	3.42 0.66	3.24 0.69	3.29 0.73	3.46 0.64
生物資源学部 (936)		3.23 0.65	3.37 0.64	3.15 0.70	3.17 0.74	3.36 0.64
	生物資源学科 (936)	3.23 0.65	3.37 0.64	3.15 0.70	3.17 0.74	3.36 0.64
海洋生物資源学部 (1142)		3.23 0.71	3.35 0.72	3.17 0.76	3.14 0.82	3.34 0.73
	海洋生物資源学科 (1142)	3.23 0.71	3.35 0.72	3.17 0.76	3.14 0.82	3.34 0.73
看護福祉学部 (2283)		3.45 0.64	3.50 0.65	3.34 0.67	3.38 0.74	3.50 0.63
	看護学科 (1562)	3.51 0.63	3.53 0.64	3.40 0.66	3.43 0.73	3.53 0.63
	社会福祉学科 (721)	3.31 0.66	3.42 0.64	3.21 0.67	3.27 0.74	3.42 0.64
科目等履修生・聴講生 (38)		3.21 0.77	3.66 0.47	3.45 0.68	3.53 0.68	3.68 0.46
入学年次別 (8624)						
1 1 生 (3)		3.33 0.47	3.33 0.47	3.33 0.47	3.00 0.82	3.33 0.47
1 2 生 (18)		3.78 0.42	3.72 0.45	3.67 0.47	3.61 0.59	3.72 0.45
1 3 生 (11)		3.36 0.77	4.00 0.00	3.73 0.62	3.64 0.48	4.00 0.00
1 4 生 (32)		3.28 0.84	3.41 0.82	3.38 0.74	3.44 0.83	3.44 0.75
1 5 生 (512)		3.37 0.67	3.53 0.63	3.42 0.64	3.46 0.67	3.56 0.62
1 6 生 (1487)		3.36 0.63	3.40 0.65	3.27 0.67	3.33 0.70	3.44 0.59
1 7 生 (2652)		3.30 0.66	3.39 0.66	3.23 0.67	3.25 0.74	3.41 0.63
1 8 生 (3909)		3.33 0.71	3.42 0.70	3.21 0.74	3.22 0.79	3.43 0.70
部局別 (8624)						
経済学部 (2360)		3.25 0.70	3.31 0.72	3.14 0.72	3.18 0.76	3.35 0.68
生物資源学部 (442)		3.24 0.58	3.37 0.63	3.14 0.66	3.27 0.68	3.36 0.64
海洋生物資源学部 (651)		3.18 0.71	3.32 0.73	3.14 0.74	3.12 0.82	3.29 0.74
看護福祉学部 (1605)		3.46 0.62	3.48 0.65	3.35 0.65	3.41 0.73	3.49 0.63
学術教養センター (3566)		3.36 0.68	3.48 0.63	3.28 0.70	3.28 0.75	3.50 0.63
規模別 (8624)						
1 0 0 人以上 (4054)		3.29 0.69	3.39 0.66	3.21 0.70	3.25 0.75	3.42 0.64
1 0 0 人未満 (4570)		3.37 0.66	3.43 0.68	3.26 0.71	3.28 0.76	3.44 0.67

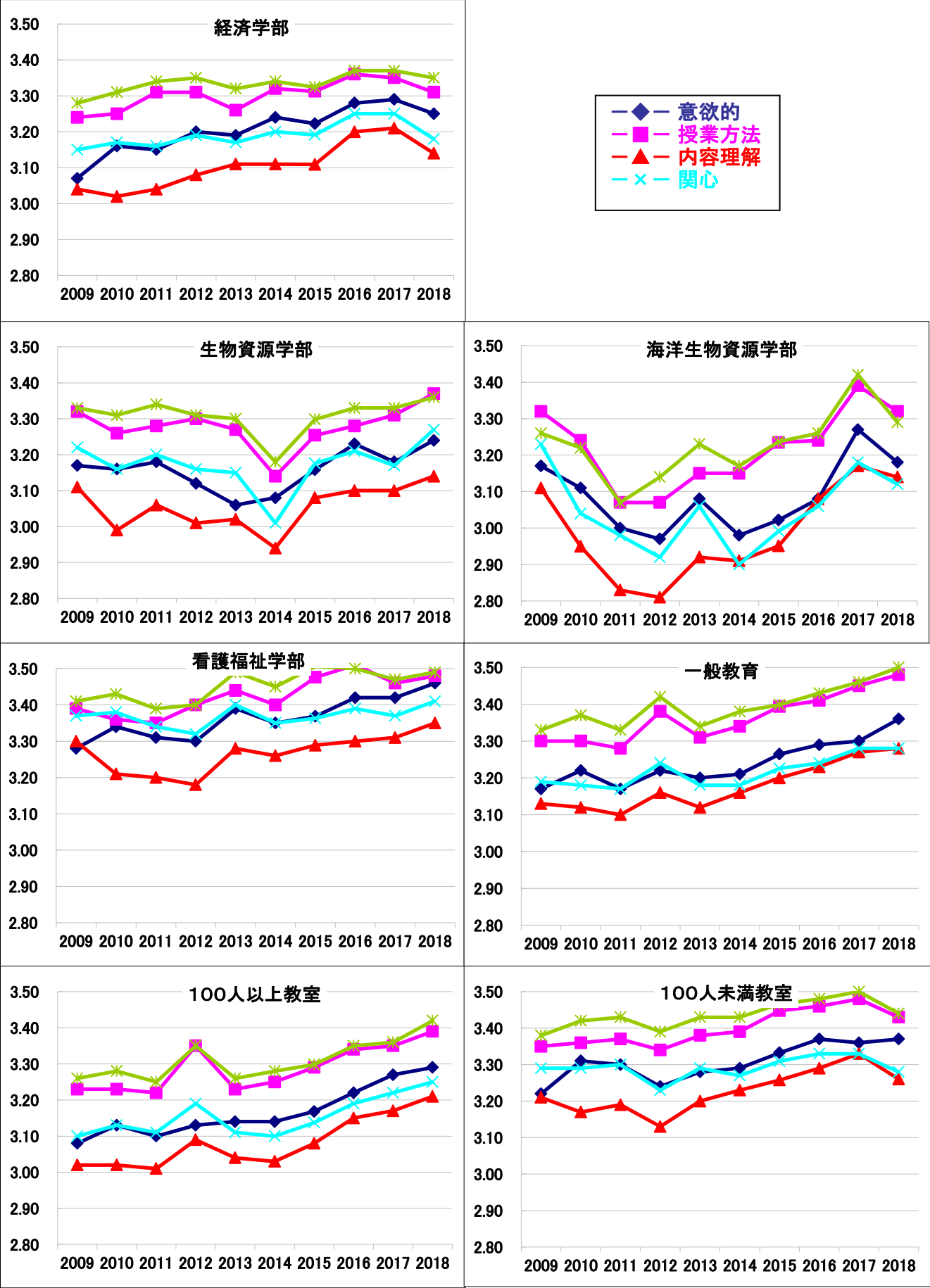
平成30年度 後期 学生による授業評価全体集計結果 (大学院生)

集計グループ (集計数)		Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体 (138)		3.38 0.64	3.55 0.53	3.31 0.60	3.52 0.64	3.57 0.55
研究科専攻別 (138)						
経済・経営学研究科 (34)		3.62 0.54	3.82 0.38	3.59 0.49	3.79 0.47	3.82 0.38
	地域・国際経済政策専攻 (6)	4.00 0.00	4.00 0.00	3.83 0.37	3.83 0.37	3.83 0.37
経営学専攻 (28)		3.54 0.57	3.79 0.41	3.54 0.50	3.79 0.49	3.82 0.38
	生物資源学研究科 (81)	3.21 0.60	3.38 0.53	3.12 0.60	3.30 0.67	3.40 0.58
生物資源学専攻 (68)		3.22 0.61	3.44 0.53	3.15 0.58	3.34 0.68	3.43 0.58
	海洋生物資源学専攻 (13)	3.15 0.53	3.08 0.47	3.00 0.68	3.08 0.62	3.23 0.58
看護福祉学研究科 (23)		3.65 0.70	3.74 0.44	3.57 0.50	3.91 0.28	3.83 0.38
	看護学専攻 (12)	3.58 0.86	3.75 0.43	3.75 0.43	4.00 0.00	3.92 0.28
社会福祉学専攻 (11)		3.73 0.45	3.73 0.45	3.36 0.48	3.82 0.39	3.73 0.45
	科目等履修生・聴講生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別 (138)						
1 1 生 (0)		— —	— —	— —	— —	— —
	1 2 生 (1)	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
1 3 生 (0)		— —	— —	— —	— —	— —
	1 4 生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 5 生 (0)		— —	— —	— —	— —	— —
	1 6 生 (0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 7 生 (6)		3.00 0.58	3.50 0.50	3.17 0.37	3.33 0.47	3.50 0.50
	1 8 生 (131)	3.40 0.64	3.55 0.53	3.31 0.61	3.53 0.65	3.57 0.55
部局別 (138)						
経済・経営学研究科 (50)		3.48 0.57	3.70 0.46	3.44 0.54	3.62 0.63	3.70 0.50
	生物資源学研究科 (65)	3.20 0.61	3.35 0.54	3.11 0.61	3.29 0.65	3.37 0.57
看護福祉学研究科 (23)		3.70 0.69	3.78 0.41	3.61 0.49	3.96 0.20	3.87 0.34

重要項目の経年特性(前期)



重要項目の経年特性(後期)



1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

1.2.3 FD研修

全体研修のみ示す。それぞれの詳細および各部局で行った研修は、2章「各部局のFD活動」にて報告する。

学内研修

- 第1回 全学ミーティング 平成30年4月11日（水）
（テーマ）入試制度検討委員会からの中間報告
今後数年間の主要な取組みについて
- 第2回 全学ミーティング 平成30年5月9日（水）
（テーマ）教職員の情報セキュリティの確保について
次期中期計画の方向性について
- 第3回 全学ミーティング 平成30年6月6日（水）
（テーマ）第3期中期計画の骨子（案）について
- 第4回 全学ミーティング 平成30年7月11日（水）
（テーマ）次期中期目標について（報告）
FDの実績と課題について
現時点の就職状況と未内定学生への対応について
キャンパスライフの安全と充実について
- 第5回 全学ミーティング 平成30年11月28日（水）
（テーマ）最近の学生の状況と企業の新入社員への不満
第3期中期計画（案）について（経過報告）
大学入学共通テストにおける英語認定試験の取扱いについて
- 第6回 全学ミーティング 平成31年2月19日（火）
（テーマ）第3期中期計画について
COC+の報告と展望について
授業料の無償化について
働き方改革関連法施行に向けた対応について

学外研修

- 第9回 Fレックス合宿研修会
開催日：平成30年9月12日（水）～13日（木）
開催大学：仁愛大学
- 第7回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ
- 第3回アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ
開催日：平成31年3月22日（金）～24日（日）
開催校：福井工業高等専門学校

1.2.4 実施要項

福井県立大学学生による授業評価実施要項

- 1 目 的
学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。
- 2 対象教員
専任教員および非常勤講師
- 3 対象学生
学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生
- 4 対象授業
(1) から (3) を除く授業科目
ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。
(1) オムニバス授業
(2) 実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科
(3) 実施期間終了後の集中講義
- 5 期 間
前期科目： 前期 期末試験期間前の2週間
後期科目、通年科目： 後期 期末試験期間前の2週間
集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。
- 6 方 法
アンケート用紙にて実施する。
ただし、事前の申請により、LMSにて実施することができる。
- 7 項 目
評価は、下記項目について実施する。
(1) から (5) については、4段階評価とし、(6) については、自由記述とする。
ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。

(1) 受講の意欲
(2) 授業方法
(3) 内容の理解
(4) 関心
(5) 総合評価
(6) 感想等
- 8 評価結果の取扱い
評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、アンケート用紙を教員に送付する。教員がアンケート用紙を事務局に返却後、評価結果およびLMS実施データともに部局長の閲覧に供する。部局長は必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。
評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。
- 9 評価結果の公開
(1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内LAN内のウェブページにて公開する。
ただし、7（6）感想等の記載内容については、公開しない。
評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。
(2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内LAN内のウェブページにて公開する。

【 附 則 】

平成26年 4月 1日 施行
平成27年 5月26日 改正（期間）
平成29年 6月 7日 改正（評価結果の取扱い）

2.1 経済学部（アンドレイ・ベロフ・山崎淳）

経済学部の本年度のFD活動は、①「授業評価」（前期、後期）、②「授業公開」（4件、うち前期2件、後期2件）、③FレックスのLMS（learnig Management System）を用いた授業の取り組みと課題についての意見交換を目的とする教員懇談会（後期）、④LMS講習会を開催した。また、上記の以外にも、演習や外書講読の進め方等についての話し合いなど、FD活動に関する自主的な議論は日常業務の中でも行われている。

2.1.1 授業評価アンケート

＜2018年度前期授業評価アンケート＞

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.29 (+0.70)	3.36 (+0.71)	3.20 (+0.72)	3.21 (+0.76)	3.38 (+0.67)

＜2018年度後期授業評価アンケート＞

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.32 (+0.68)	3.40 (+0.68)	3.22 (+0.70)	3.25 (+0.74)	3.44 (+0.64)

2.1.2 授業公開

(1) 方針

経済学部の授業公開ポリシーは、従前通り、具体的な授業参観を通して公開者・参観者の授業改善に資することを目的とし、公開者と参観者の間で率直な意見交換を行うことである。

(2) 実施実績

〔前期〕：2件の授業公開

科目名：移行経済論

担当：アンドレイ・ベロフ

日時：2018年6月14日（木）2時限目

場所：L110

参加教員からのコメント（順不同）

- ・外部講師による英語での講義を取り入れた授業であった。前段で日本語による内容説明が資料を用い丁寧になされ、しっかりと理解できるように工夫されていた。
- ・海外の写真、データが多く用いられ、リアリティを感じられる授業であった。学生が興味を持てるような工夫が参考になった。
- ・外部講師との質疑の時間が少なかった印象がある。せっかくの機会なので学生からの質問を受け付ける時間を確保できればよいと思った。

科目名：演習Ⅰ（合同ゼミ：廣瀬ゼミ、桑原ゼミ）

内容：（回帰分析を主としたデータ分析の入門講座）

日時と講義概要：

- 3回シリーズの第1回目（実証分析の意義と仮説設定について）

5月8日（火）3限（13:00～14:30）

- 3回シリーズの第2回目（回帰分析ソフトの使い方と結果の見かたについて）

5月15日（火）3限（13:00～14:30）

- 3回シリーズの第3回目（仮説検定と予測の仕方について）

5月22日（火）3限（13:00～14:30）

場所：第1情報演習室

〔後期〕2件の授業公開

科目名：ロシア経済論

担当：アンドレイ・ベロフ

日時：2018年12月6日（木）2時限目

場所：L109

参加教員からのコメント（順不同）

- ・英語で行われる専門科目は珍しいため、学生達も刺激を受けたと思われる。また、ロシアの財政制度の特徴と近年の政治的流れ等についても分かりやすかった。とりわけ、配布資料がコンパクトにまとめられており、本日の狙いやキーワードなども整理されていた点は、参考にさせていただきたいと思った。多分、毎回同じ形式で配っておられるかと思うが、学生達がテスト前等に復習をする際に（時間が経ってから見直してもすぐに思い出せ）大変分かりやすいと思われる。
- ・講義開始後30分内では10名近く、ひどい学生では1時間後に平然と入室してきた学生もいた。今回はとりわけ、外部講師の先生をお呼びしており、同じ県大教員としてこちらも恥ずかしく、申し訳なく思った。
- ・英語で感想を書いてこられた学生さんがいらしたようで、とても興味深い講義であったことを直接自分の言葉で講師の先生にお伝えしたかったのだと思う。どのような刺激を与えると学生に興味を持たせることができるか、勉強させていただいた。

科目名：卒業論文報告会

担当：原田ゼミ、廣瀬ゼミ、桑原ゼミ

日時：2018年2月8日（金）3-5時限目

場所：L111 他

参加教員からのコメント（順不同）

- ・自分たちでテーマを探させること自体に意義があると感じた。
- ・学生による聞き取り調査・インタビューなどの資料収集方法は大変参考になった。
- ・他ゼミの卒業論文への取り組み方が良くわかり、次年度からの指導の中で、とりわけじっ

くりと書籍を読むことに目を向けねばと反省した。

- ・卒論の場合、どうしても専門的になるためか、質疑応答が低調になりがちでした。
- ・論文では、しっかり書いてある内容について、パワーポイントでの説明では端折っていたり、フロアーにわかるよう説明することに力点が置かれ、論文の核の部分がアピールできていなかった。この点についても指導を加えていきたい。

2.1.3 LMS講習会

日時：2018年7月11日（水）、3限（13:00～14:30）

場所：情報第2演習室(出席者5名)

講師：学術教養センター山川修先生

テーマ：①FレックスのLMSでできること
②講義活用のヒント等

2.1.4 部局内FD教員懇談会

経済学部懇談会

日時：2019年1月16日（水）、3限（13:00～14:30）

場所：経済学部棟9階会議室(出席者8名)

テーマ：①FレックスのLMS（learnig Management System）を用いた授業の取り組みと課題
② その他

既にFレックスのLMSを授業で活用している教員の事例を参考に授業改善のための方法について意見交換した。

懇談会での議論の概要（順不同）

授業の配布資料等

- LMSを活用して資料を配布することで印刷の手間が省ける。特に受講生の多い授業では活用の効果が大きい。
- LMSを用い、動画（短い）による事前、事後学習が可能である。
- LMSを課題の提出先にすると提出に関する管理がしやすい。課題にコメントをつけて返すことができるのも便利である。
- LMS上でオンラインテストを受験してもらうことが可能であり、理解度を確認することができる。

授業評価での活用について

- 授業評価を電子版にした方がアンケートを簡単に作れ、集計・解析などもスムーズに行えるのではないか。
- LMSを活用して授業評価をする方が費用削減できるのではないか。
- LMSを活用して授業評価アンケートを実施している教員も既にいるので、この取り組みを経済学部、全学に広めることはできないか。
- 授業評価の電子化については賛成だが、その体制・設備が整えられるのかについて検討が必要である。

その他

- 授業評価アンケートの実施時期を学期途中、例えば中間テストの後に実施するとアンケート結果をその後の授業に反映できるのではないか。
- 授業評価アンケートは試験後にすべきではないか。海外の大学では成績発表後の1か月間に実施している事例もある。回収率は下がるが、授業を改善させるための貴重な情報が得られている。
- シラバス（印刷したもの）の配布をやめたが、そのことによる問題（シラバスを読まなくなるなど）がないかの確認も必要である。

2.1.5 授業改善についての課題と展望

本年度は、学術教養センター山川先生にご協力をいただき、LMS講習会を開催した。この講習会ではLMSで何ができるのか、どのように活用することができるのかの具体的内容についてご指導いただいた。授業を効果的なものにするための活用方法が理解できた。

また、部局内教員懇談会では「フレックスのLMSを用いた授業の取り組みと課題」をテーマに意見交換を行い、LMSの活用事例や、今後の活用の可能性について議論した。このような本年度の一連の活動は、今後の授業改善につなげられるものになったと思う。

本年度も授業改善のための授業評価アンケート実施について、アンケート内容、実施の時期、方法について意見が出された。実施開始から10年が過ぎ、あらためて授業評価に何を求めるかを含めて考え直す時期であると考ええる。この議論から始めることで今後の課題がより明確となるだろう。

2.2 生物資源学部（伊藤崇志）

2.2.1 授業評価

学部の授業評価結果は、「意欲的受講」前期3.29+後期3.23（前年、3.30+3.25）、「授業方法」前期3.39+後期3.37（前年、3.38+3.39）、「内容理解」前期3.22+後期3.15（前年3.23+3.16）、「関心」前期3.26+後期3.17（前年、3.29+3.19）、「総合評価」前期3.41+後期3.36（前年3.42+3.39）であり、直近の3年は高い評価が得られている。

大学院の授業評価結果は、「意欲的受講」前期3.50+後期3.21（前年、3.50+3.25）、「授業方法」前期3.83+後期3.38（前年、3.83+3.63）、「内容理解」前期3.17+後期3.12（前年、3.17+3.38）、「関心」前期3.67+後期3.30（前年、3.67+3.38）、「総合評価」前期3.65+後期3.40（前年、3.65+3.50）であった。こちらも、良好に講義が進められていると判断できる。

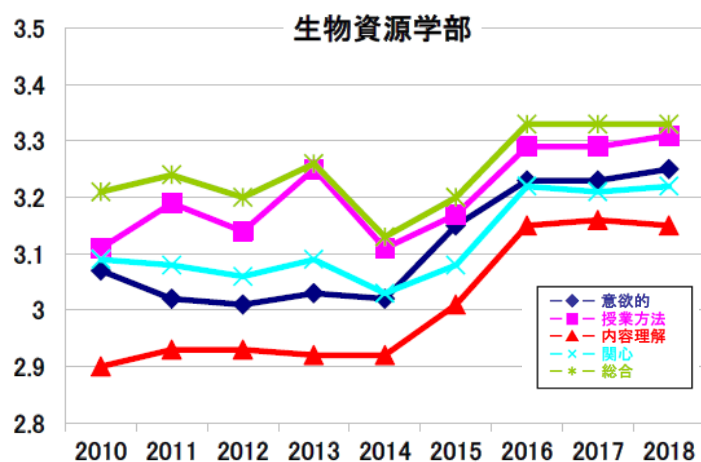


図 授業評価スコアの経年変化

2.2.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

生物資源学部では、各教員が、必要に応じて自分が担当していない講義を聴講し、授業内容を直接確認できるよう、全講義を対象に、希望者が事前に担当教員に連絡することでいつでも参観できる「随時公開制」を採っている。

(2) 実績

今年度、担当外の講義を参観した教員はいなかった。

2.2.3 授業改善の取り組み

生物資源学部では、2011年度より、各教員が、学生の理解を助けるために行っている、授業（学生実験を含む）上の工夫を調査により収集し、全教員でその情報を共有する取り組みを行っている。

本年度は、テーマを「授業を担当しての感想など」として情報収集をし、教員間で情報共有をした。

アンケート結果

講義中に出席を取るため出席率が高い。しかし、講義中にスマホで漫画、動画を楽しむ学生が

増えてきた。また講義では教科書を使用するが、教科書を持参しない学生が多い。
アクティブラーニングのため講義や実験などで、従来行ってきた演習形式のほかに、グループワークを少しずつ取り入れている。必修科目では、こなすべき内容がタイトであり、グループ内で話し合う時間の確保が困難であるが、グループ毎にまとめた内容を互いに学び合うことはある程度実現できていると考えている。学生にも一定の良い効果を与えているとは思いますが、アクティブラーニングの意味を理解しているのか「？」がつくこともある。 主体的に学ぼうとはせず、ボーットして何を聞いているのか分からない学生もいるし、過去問を入手して何とか、その場をしのぎようとする態度の学生もいる。まずは面白がり、教える側の意図をしっかりと理解して、万全な準備で試験に臨む学生と、そうではない学生の差が開いてきているように感じる。
授業を行う上で欠かせない学習環境を、以下のように改善して欲しい。 ①プロジェクターの機種変更やシステムをバージョンアップした場合の対応 ・当該教室のシステムを利用する教員にも前もって連絡して欲しい。また、変更後の対応に関する説明書を置いて欲しい。学期途中で、いつの間にかシステムが変更され、パワーポイントのスライドが送れずに困ったことがある。 ②100名以上収容の大規模教室では、電子黒板を大きくして欲しい。 教室規模に応じた電子黒板でないと、教室後方部からは字が見えにくいようだ。
授業科目：生態学Ⅰ（生物資源学科2年次後期・選択科目） 課題の発見力・解決力を養うことを目的として、講義最終回では質問会議形式によるグループワークを実施した。また期末試験においてグループワーク内容を記述する問題の出題とオリジナリティの高い回答を高評価することを宣言して、討論参加への積極性を引き出す工夫をした。この試みをブラッシュアップして来年度も実施したい。
毎回、プリントだけでなく PowerPoint で食品現物の写真などを見せるように工夫したところ、授業を「面白い」と感じてくれる学生が増えました。「面白い」と感じたトピックスは、学生によってさまざまでしたが、体験型学習や写真・現物回覧などを取入れた授業は、特に印象に残ったようです。一方それでも、講義を「単位を取るための手段／作業」ととらえる学生の比率も増加しているようです。
15回の授業で使う資料を1回目の授業時にすべて配布しているが、昨年度まで中間試験と期末試験の2週間前に配布していた「試験のための練習問題」を1回目の授業時まとめて配布した。練習問題の項目を見て予習復習し、毎回の授業のポイントを考えながら受講できるようになったと思う。両科目とも試験の成績は上昇し、不可の学生はほとんどいなくなった。
2年生の授業評価アンケートの自由記述欄に「演習を授業時に実施してくれればもっと授業に関心を持てたと思う」というコメントがあった。このような感想は初めてで、学生が自習できるように工夫すればするほど学生の自主性がなくなり教員への依存度が増していくように感じた。
3年後期の選択科目を担当しているが、授業に遅刻する学生が異常に多かった（例年は数%であったところが30-40%程度）。注意をしたものの、その他の講義への出席態度について懸念がある。来年度は出欠を早めの時間にとるなど、基本的な授業態度の改善ができるよう、出欠を早い時間にとるなど、効果的な対応をしたい。

やや難易度が高いと思われる内容であっても、しっかり授業について来ています。また、積極的に問題演習に取り組み、新しいことを身につけようという姿勢が見られます。この調子で勉強を続けてくれればと思います。
授業では、基本的知識を中心とした内容構成で、専門知識の習得を目指しながら、社会で応用利用されている実用例や、最近の経済新聞に掲載された最新技術をトピックスとして紹介することで、基礎から応用までの研究発展を理解しやすいように努めた。 小テストの設問で、授業に対する要望を聞いたところ、最新技術に関するトピックス紹介は大変好評であり、大学の学びが社会に繋がることを実感したという意見もあった。授業を通して知ったトピックスを、改めて自分で調べてみた学生もあり、教科書からだけでは学ぶことのできない知識や興味を感じてもらえたことに、やりがいを感じた。
最低限覚えるべき内容は繰り返し説明し、小テストなども利用した。理論的な解説は必要であるが、なかなか頭に入らないことも多いため、身の回りにある具体的な例を引用して説明し、興味を持って理解してもらえるようにした。 教員から学生への一方通行にならないように、グループ討議を行った。数人のグループに分け、1つのテーマを議論し、結論をまとめグループごとに発表してもらう方式を取った。これによって、それぞれの学生が意見を述べ、最後にグループとして意見としてまとめるという自発的な姿勢が多少でも身につくと考えられる。
授業中に教科書を参考として課題プリントを埋める作業を課しているが、教科書を買って持ってくるのは20人中3人程度である。しょうがないので、ネットで調べるように促している。教科書や本を読めない学生が増えていて会社に入っても使えない、とも巷でいわれているので、教科書を読む習慣、能力を養ってほしいと思うのですが。
ミニツツペーパーで、今日の授業で分かったことと分からなかったことを書くように指示しているが、わからなかったことを書いてこない学生がほとんど。わからなかったことを明らかにする、質問する力をつけてほしいので、今後、無理やりわからなかったことをひねり出すように指導しようと思う。
講義中に20分以上、こちらからはなし続けると学生はポカーッとしだすように感じる。講義中にはなし続けなくてもいい何か良い方法はないものか。

2.2.4 授業改善活動についての課題と展望

授業評価の結果からは、良好な講義、学生実験が進められていると判断できる。教員内でアンケートを実施したところ、アクティブラーニング等の新たな取り組みが行われていることから、教員による授業改善努力が授業評価におけるよい評価につながっていると考えられる。今後もこのような取り組みを継続し、また、各教員の取り組みを学部全体で実施していくことで、学生の学習意欲の向上につなげていく必要があると考える。一方で、遅刻の多い学生や教科書を持参しない学生など、従来から存在する問題点も改めて確認することができた。このような点も授業改善として取り組むべきであり、今後の課題と考える。

2.3 海洋生物資源学部（田原大輔）

2.3.1 授業評価

昨年は、海洋生物資源学部の平均は前期後期ともに全学の平均値と大差は無かった。しかし、前期では学部授業の項目では全学平均と同程度であったが、後期では各項目および全体評価でも全学平均より若干低くなる傾向にあった。次年度以降の後期授業評価の動向を注視していく必要がある。

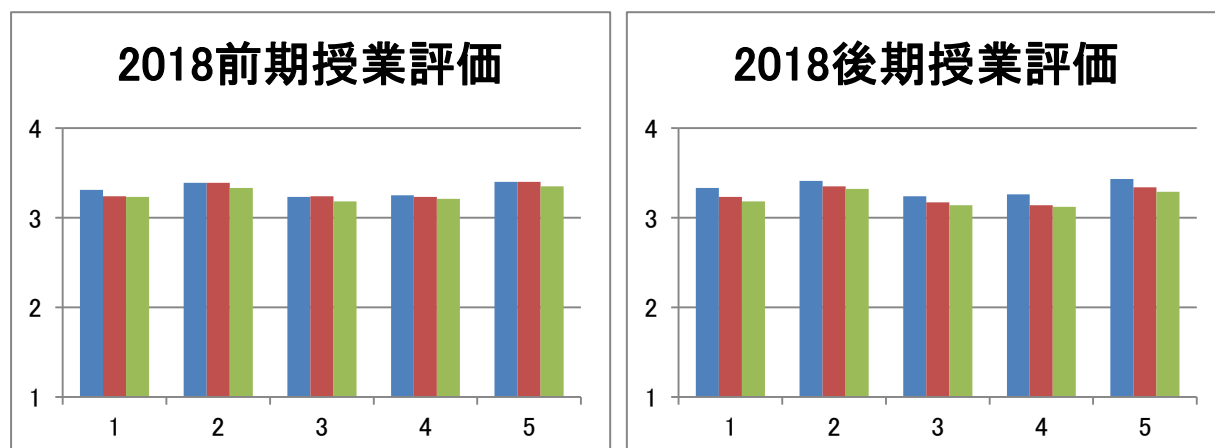


図 2017 年度前期および後期の海洋生物資源学部の授業評価結果

1 点が低い評価、4 点が高い評価

授業評価項目 1. 授業意欲；2. 授業方法；3. 内容理解；4. 関心；5. 総合評価

青色：全学の平均、赤色：海洋生物資源学部の平均、緑色：海洋生物資源学部の授業の平均

2.3.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会の提供を第一の目的とする。授業公開は大学教育における画一的で理想型の模範授業を目指すためのものではなく、教育の自由が保障されるなかで、個々の授業内容に合わせたより特色のある授業を継続的に育むことが大切である。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを趣旨として実施している。しかし、授業公開を実施しても、参加人数が少なく、毎回決まった教員のみが参加している問題点もあった。

そこで、本年度は授業公開の代わりに、本学部では初めて、全教員に授業の取り組みや改善点などのアンケートを実施し、各教員の授業の工夫や取り組みを学部全教員で共有することを試みた。本学部 22 名全員からの結果は 2.3.4 に後述する。

(2) 実績

無し

2.3.3 FD研修会への参加

第9回FD合宿研修会

日時：2018年9月12日（水）～13日（木）

会場：仁愛大学

参加者：本学から田原

本研修会の1日目に参加し、法政大学の藤田氏による「グループ活動の活動性を高めるために一初年次教育での実践例―」および参加型ワークショップ「初年次教育における、効果的なグループ活動について」に参加した。

前者の講演では、自主的に学ぶ姿勢をもつ学生を育てるには、授業前後で本人の考え方が変わった（変化した）ことを学生に気付かせることが重要であると紹介していた。そのためには、例えば、授業冒頭に質問に対する答えを記入させ、授業終了後に同じ答えを記入させるなどして、自らの考え方の変化などを授業の前後で認識させる方法を説明されていた。また、グループ活動やグループディスカッションを円滑に進めるためには、“全員が話し合いに貢献できるようにルールを定める”ことが必要である。つまり、シンク・ペア・シェア（いきなり意見の発言をさせない。まず考える時間を設定する。即興で発言させるのはハードルが高いため、書いた考えを紹介させるなど）、ラウンド・ロビン（発言の機会を全員に保証し、メンバー全員が一定時間内で順番に話す機会を与えるなど）、ミラーリング（直前の人の発言を手短かに・正確に要約してから自分の意見を発言させるなど）のルールを設定して議論する必要があることが紹介された。

研究室ゼミなどにおいて学生間のグループディスカッションがうまくできない、進まない事例が多い。ディスカッションには先のようなルールを設定することで、参加学生に均等に発言する機会を与えることができ、必ず学生が発言するようになるだろう。またミラーリングの実践によって、他の学生の意見を集中して聞くような変化が期待できる。先ずは研究室ゼミで実践したいと考えている。

2.3.4 授業改善についての課題と展望

2019年1月に以下の項目についてアンケートを実施した。

- 1) 出席・遅刻者の確認方法
- 2) 学生の理解度を把握するための取り組み（できる限り詳しく記載願います）
- 3) 授業で工夫していること・気をつけていること（できる限り詳しく記載願います）

1) 出席・遅刻者の確認方法

口頭で点呼：8人

- 小テスト時には、点呼と小テスト受験者数の一致を確認して代返を防止している

遅刻者の確認方法

- ✓ 授業終了時に自己申告させる
- ✓ 授業開始15 - 30分後に出席確認を実施する

出席カード：7人

- 出席カードや出席簿を配布する

遅刻者の確認方法

- ✓ 遅刻者と分かるようにチェックを入れた出席カードを配布する
- ✓ 授業開始 15 - 30 分後に出席カードを配布する

小テストまたは課題の毎回提出：3人

- 小テスト返却時に残った答案から欠席者を判定し、未受験者には名前を点呼して確認する
- 小テスト返却が無いときは出席カードの配布で確認する

遅刻者の確認方法

- ✓ 授業終了時に自己申告させる
- ✓ 授業開始 15 - 30 分後に課題を実施する

指定座席を目視確認：3人

- 学籍番号順または指定した座席に座らせて、空席を欠席者として判定する
- 少人数のため目視確認している

カードや口頭点呼をランダムに実施：1人

- 全体の人数は毎回把握して実施している

2)学生の理解度を把握するための取り組み(できる限り詳しく記載願います)

- 数回の小テストを実施する
- 口頭試問で学生自身に答えさせる
- 出席カードに、毎回の講義内容のキーワードを書かせる
- 出席カードにその日の講義内容に関する設問と、疑問や理解が難しかった点を記入してもらう
- レポートまたは課題を提出させる
- プロジェクター上で、章末に一問一答形式の演習を行う。これにより理解度を把握するとともに、各学生自身に自分の到達度を確認させる
- 小テストの各問題の解答率を集計し、解答率の低い問題に関連した講義内容について、後日の講義の中で繰り返しの解説を行っている
- 重要と考えられるテーマを授業終了 15 分ぐらい前に提示し、講義内容を踏まえてそのテーマを整理させる
- 理解度判定問題を作成して、重要な事項を自分でまとめることができるようにしている

3)授業で工夫していること・気をつけていること(できる限り詳しく記載願います)

授業の進め方や説明方法など

- 授業の開始時、5～10分程度、前回の講義内容を復習している
- 質問カード等から理解度が不足していると判断した内容や、取り上げるべき質問などは次回講義で丁寧に解説するようにしています
- 原理的な内容を話した後、できるだけ多くの具体例や例題を取り入れ、反復してトレーニングさせることで理解を深めるよう配慮している
- 解かねばならない問題などの説明には、必ず例えを付けるようにしています
- 特定の制度、現象の背景にある現実の社会についての理解が深まるよう留意している。
- 基本的には学生の理解状況を見ながら、ゆっくりと講義をすることを心がけている
- 講義の開始時にこの講義で理解することを板書する
- 一方向の授業にならないよう、また集中力維持のため、質問等のやりとりでできるだけ発言を促している
- 少人数のグループ単位で課題を与え、授業時間内に考えさせ発表させる
- 受講姿勢の改善のため、授業、実習の受講に必要な情報の提供を減らし、質問する余地・必要性を与える
- できるだけ学生に発言させるようにしていますが、反応は薄いです
- ばらばらの知識の詰め込みにならないように、学習項目のつながりや全体のまとまりが理解できるように講義している
- 共通の調査課題を提示し、4名程度の班を作り、調べた内容について発表し合う時間を設けている
- 具体的にイメージできるように具体例を示すようにしています。ただ授業を聞くだけではなく、脳を通るようにしてもらってます（全員に質問する。ノートは手書きなど）
- うるさい学生に口頭で注意する

板書やパワーポイント

- 学会や大学などが公開している教育用の動画教材を探して活用しています
- パワーポイントを使い、視覚的に印象深い内容にする
- 板書を極力パワーポイントで示し、判別しやすいようにする
- 板書する前に軽く説明して、板書して、さらに説明です（板書をしながら話さないこと）
- 板書の字を大きく書く

配布資料

- レジュメを配布していますが、それに板書を書き込めない様にしてあること

- 配布資料は空欄を設けて、重要事項はスライドを見て各自が書き込む様式で作成する
- カラー印刷した授業資料を配布している
- 授業資料にすべてを記入せず、適宜、板書している（すべてを記入しておくとう学生が安心して集中して話を聞かない傾向があるため）

F レックスの活用

- F レックスコースに資料（過去5～6年分の中間・期末試験問題とその解答・授業で配布するプリントのPDFファイル）を掲載する
- 理解度判定問題と講義に用いた資料をすべて F レックスにアップすることで予習と復習をしやすくしている

その他

- 座学中心だが、地域に根付いていることを理解させるために、現地視察を行い、問題点を見つけさせる

2.3.5 F レックス LMS 講習会（海洋）

開催日 2018 年 9 月 11 日

開催場所 LL 教室

講師 徳野淳子（学術教養センター）

参加人数 8 名

学術教養センターの徳野先生より、授業で F レックス LMS を活用するための講習会を開催した。講習会では、授業資料の閲覧や課題の提出、小テストの実施、受講生への連絡、授業評価アンケートの実施についての設定方法や使用方法を、参加者が実際にパソコンを使って実践する形で行われた。また、併せて本学部富永先生より授業での活用ポイントなど事例紹介があった。

授業資料の閲覧は、欠席した学生や受講者の自主学習には非常に有益なツールであると確信できた。F レックスの積極的活用を促すためには、このような講習会を継続して開催していく必要がある。また、本学部教員による活用事例の紹介は、本学部教員間で操作方法などを気軽に問合せすることができるメリットもあると思われる。

2.3.5 その他

F レックス LMS 活用実績

2018 年度における海洋生物資源学部の F レックス LMS 活用実績は、開設数が 29 科目(前期 15、後期 14)で、昨年より 5 科目増加した。ただし、同一教員が複数の授業で開設していることあり、全体のうち一部の教員しか活用していない実態もある。今後は、講習会を継続的に実施するなどして、利用する教員を増加することが必要だと思われる。

2.4 看護福祉学部（大川洋子・北 明美）

本年度実施した授業評価、授業公開、授業改善への取り組み、FD研修、授業改善についての課題と展望を以下に報告する。

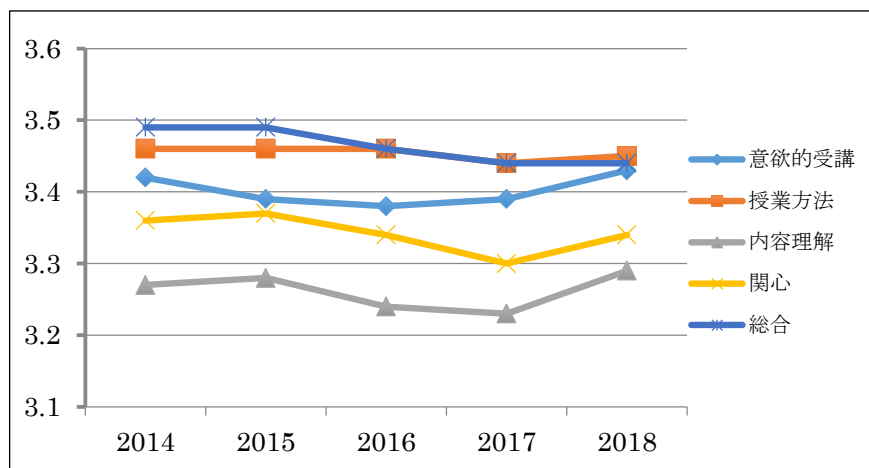
2.4.1 授業評価

2.4.1.1 看護学科

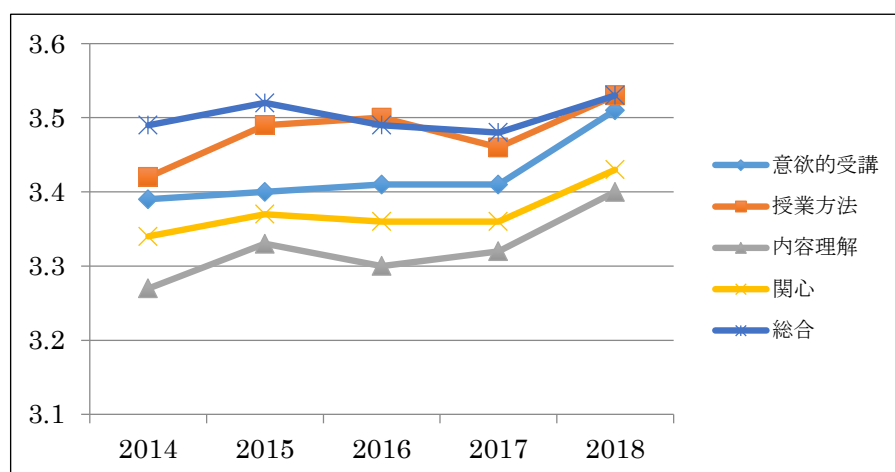
授業アンケートの結果は前期・後期共に平均 3.4～3.5 点の範囲で推移している。2017 年度に平均点が一旦下がったものの 2018 年度は上昇に転じた。特に、後期には評価項目全てが明らかに上昇し、2014 年からの推移の中で最も高い得点であった。

近年、学生の授業態度や看護への関心などが低迷し、学修が滞りがちな学生への履修支援等の面談数が増えていることから、授業評価結果だけで一概に良好に転じたとは言い難い。一方で、前期授業評価を教員が真摯に捉え、後期に授業方法を見直すなど改善した成果とも考えられる。

看護学科は約 8 割の専門科目が専任教員のオムニバスで実施し、授業に関する学生の様子やレポートを教員間で共有し、さらには授業展開の打合せを密に行っている。また、助教・教授・准教授の職位に関係なく、当然のように授業を見学している。このような教員間で協働した授業展開自体が授業改善につながっており、看護学科教員の教育文化の特徴であると考えられる。



看護学科 前期授業アンケート結果

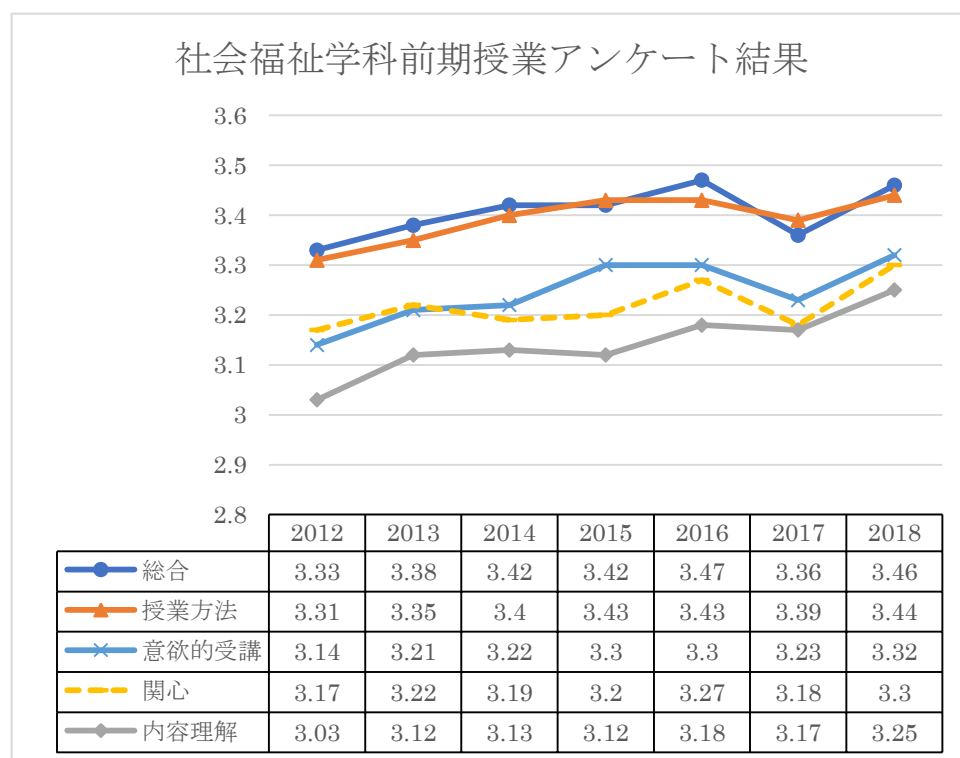


看護学科 後期授業アンケート結果

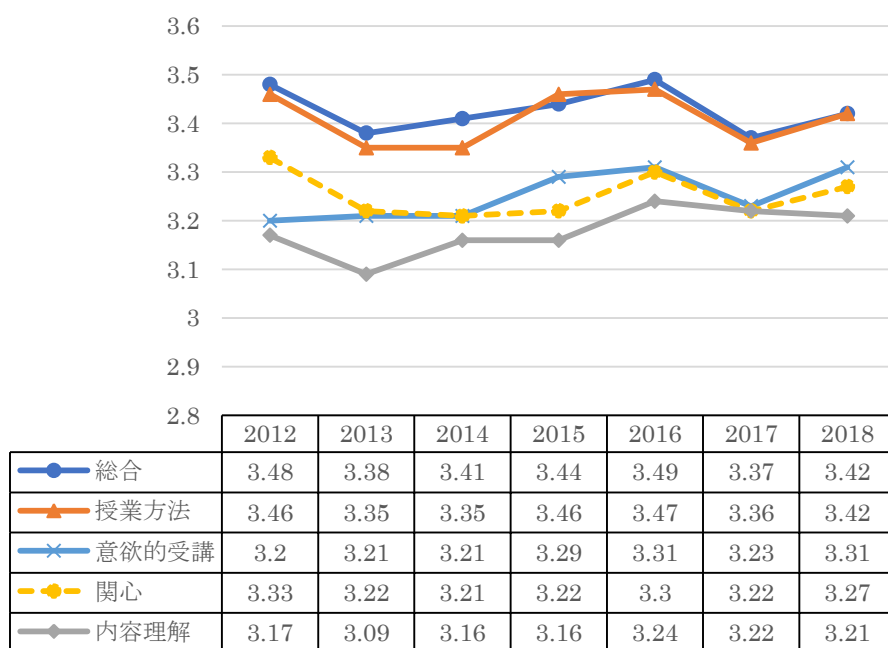
2.4.1.2 社会福祉学科

2018年度は前期・後期ともほとんどすべての項目において前年度より評価結果が改善した（後期の内容理解のみ 3.22→3.21 で微減）。前年度が相対的にそれ以前より低い評価だったため、各教員の意識が高まったのかもしれない。ただし、本学科に限ったことではないが、5項目の中で「内容理解」が最も低い傾向にあるという事態について、より本格的な分析を行いその系統的な対策を検討する必要がある。

なお、社会福祉学科においてはオムニバス授業が多く、その意味では現行の授業評価方法は必ずしも学科全体の動向を表すものではないことに注意が必要である。



社会福祉学科後期授業アンケート結果



2.4.2 授業公開

2.4.2.1 看護学科

授業公開は例年、随時公開が前提となっているが、参観した教員はいない。実質的に授業公開が成立しないのは、看護学科カリキュラムは講義や演習など複数の教員がかかわることや学外実習（臨地実習）のため、学外にすることが多いことも要因のひとつと考えられる。

先述したように（2.4.1.1）、教員が協働して一つの専門科目を担当し、なおかつ授業展開方法について打ち合わせ等を頻回に実施していること自体が授業公開の目的を満たしていると考えられる。

加えて学外研修等に積極的に参加し、看護学科全体の授業改善の取り組みとして還元している。以下（2.4.3.1）に取り組みについて報告する。

2.4.2.2 社会福祉学科

社会福祉学科では、2018年度は授業公開を行わなかった。これまでの公開で参観者がほとんどいなかった理由としては、学外実習（ソーシャルワーク実習、精神保健ソーシャルワーク実習）や演習科目が多く時間割がタイトであることがまずあげられる。ただし現状として社会福祉学科独自の取り組みが行われているので、以下に報告する。

2.4.3 授業改善への取り組み

2.4.3.1 看護学科

学生の学修や生活等に関する意見交換として教育会議を設置し、年3回開催している。2018年度は6月と1月に開催した。議題となった事は大雪の際の実習体制についてである。2018年2月の大雪の際に大学は休講（定期試験中止）の措置を取った。しかし看護学科では3年生の看護実習期間中であり、各看護実習領域の進捗状況により、実習中止の判断を各担当教員と学科長との判断にゆだねた。幸いにして影響を受けた看護実習領域は一部に留まることができた。この際に、最も懸念されたことは実習中止に伴う補充実習期間の確保が困難なことが最大の問題であった。看護実習の日程は2月末日までであるが、3月に入ると保健師課程選択学生の集中講義、4月～9月まで公衆衛生看護学実習、養護実習等が予定されていた。40名弱の学生が保健師課程選択しており、間隙をぬって中断した看護実習を実施することは物理的に困難であり、2月の段階でどのくらいの学生が補充実習の対象になるかも予想が付きにくかった。

このような大規模災害に備え、実習期間中の教員危機管理マニュアルを再検討し、2018年度中に一部を改正して教員に周知徹底することができた。一方、国家試験受験資格と関連したカリキュラム上、看護実習期間の確保は重要であるため、タイトな日程の中で予備的に実習期間をいかに確保するか、課題は解決されていない。現在、2022年度を目途にカリキュラム改正にむけたワーキングを行っている。実習期間の確保と学生の学修を支援するための方策も併せて検討すべき最重要課題である。

アメリカオハイオ州フィンドレー大学（UF）との学術交流協定が締結された。2018年度はUF保健学部看護学科からの受け入れ学生はなかったが、2019年2月11日から2週間半にわたって本学看護学科2年生の3名をフィンドレー大学に派遣できた。引率教員として笠井恭子教授が同行し、教育と研究に関する学術的交流も行った。学生・教員共々、アメリカの看護と医療に触れ、異文化における看護への関心と国際的視野を広めることができた。

2.4.3.2 社会福祉学科

社会福祉学科は実習、演習教科を含めてオムニバス授業が多く、担当する教員間において授業内容や授業方法を検討する機会を設けている。特に実習、演習教科では複数の教員間の連携が必要となり、指導方針や授業方法等についての話し合いが定期的かつ頻繁に行われている。また、実習については、実習施設、機関等の実習指導者である社会福祉専門職者との連携を密にすることが学生の学習に対する意欲を引き出し、学修の成果を高めることにつながるようになるため、年に1回、実習指導者を本学に招いて、講演会と連絡等の会議を行っている。学内では、ソーシャルワーク実習担当者会議、精神保健ソーシャルワーク実習担当者会議を毎月開催し、年に数回合同での実習担当者会議も行っている。学生の今の状況を教員がいち早く把握し、実習を通して学生の学びを系統的に深めていくためにも教員間の情報の共有が必要と考えている。また学生一人ひとりの個性を活かしつつ、専門職者として必要な知識、技術の向上を目指し、個人面談を実施しながら学業等に意欲を持たせる試みをしている。

当学科は、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の養成に関わっているため、日本ソーシャルワーク教育学校連盟、公立大学協会社会福祉学系部会などに加入し、部会や連絡会議、セミナーなどに定期的に参加している。具体的には、それぞれの担当者を決定し、学科の代表として各種の部会、セミナーに分担して参加している。こうした機会にFDに関わる議題が取り上げ

られたり,FD関連のセミナーが実施されたりすることがある。FDに関連する部会,セミナーの個別の内容については(2.4.4.2)に報告する。そこで得た知見は持ち帰って学会会議で報告され,教員間で知識の共有が図られるとともに,それに関した話し合いも行われる。

2.4.4 FD 研修

2.4.4.1 看護学科

FD 研修として学内外の研修に看護学科教員が参加した。

(1) 看護基礎教育検討委員会

参加教員：教授 笠井恭子

日時：2018 年 7 月 7 日（土）10:00～15:00

会場：福井県看護協会会館

主催：看護基礎教育検討委員会

テーマ：看護学教育モデル・コア・カリキュラムについて

講師：川本利恵子氏（公益社団法人日本看護協会常任理事）

研修概要

2017 年度に文部科学省が策定した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」の概要を理解し、コア・カリキュラムに基づく看護学実習の方向性や看護基礎教育の課題等についてグループディスカッションを行い発表した。

(2) 2018 年度看護学教育ワークショップ

参加教員：教授 笠井恭子

日時：2018 年 10 月 29 日（月）～30 日（火）

会場：千葉大学けやき会館

主催：千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

テーマ：自大学の強みや使命を活かす CQI-自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る-

プログラム概要

第 1 日目 10 月 29 日（月）

①報告「CQI モデル開発の経緯と CQI モデル Ver.1 の紹介」

和住淑子氏（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授）

②講演「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」

杉田由加里氏（文部科学省高等教育局医学教育課看護教育専門官）

③報告「外部指針を CQI にどのように使うか」

黒田久美子氏（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター准教授）

④報告「CQI 取り組み事例の紹介と CQI モデルの事例への適用」

中村京子氏（熊本保健科学大学保健学部看護学科教授）他

⑤ワーク A 自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する

ワーク B 自大学のストーリーを語り、相互にフィードバックする

ワーク C 学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け第一歩を踏み出す

ワーク D 自大学でCQI を推進する上で必要なこと・課題

第2日目 10月30日（火）

①ワーク B、C、D の続き

②全体討議

③まとめ

総括

全国看護系大学（国公立・私立）の中から 60 大学の准教授以上が参加した。

CQI（Continuous Quality Improvement 看護教育の継続的質改善）モデル開発の経緯や実践例の報告のあと、11グループに分かれてグループワークを行った。グループワークでは各大学が看護学教育において着面している課題についてディスカッションし、その内容を発表し共有した。国立・公立・私立で捉える課題の違い、各大学における多様な取り組み、大学・学部運営の方法等、さまざまな情報を交換した。また、課題解決のためのプロセスや対策を学ぶことができ今後の看護教育へのエネルギーを得ることができた。

（2）ティーチング・ポートフォリオ作成 WS（3日間）

参加教員：助教 金粕仁美

日時：2019年3月22日（金）～3月24日（日）

会場：福井工業高等専門学校

主催：F レックス

研修概要

1日目：ティーチング・ポートフォリオの説明と作成、第1稿の提出

2日目：ティーチング・ポートフォリオの作成、第2稿の提出

3日目：ティーチング・ポートフォリオの作成と概要の発表

1週後：ティーチング・ポートフォリオの作成、第3稿の提出

総括

3日間のワークショップでティーチング・ポートフォリオを作成した。ティーチング・ポートフォリオは、①教育の理念、②教育の責任、③教育の方法、④教育の成果、⑤今後の目標などの項目から構成されるものである。メンターとの面談を各日1～2回ずつ行い、今までの臨床・教育経験を振り返りながら①～⑤の内容を記載した。また、他領域の教員と話し合うことで、看護教育と他領域の教育の共通点や相違点を知ることができた。

（3）カリキュラム改正のための研修会参加に関する内容

参加教員：教授 有田広美

日時：2019年3月17日（日）9:30～16:30

会場：JA 共済ビルカンファレンスホール（東京）

主催：照林社

プログラム概要

セミナー1 「今から始めたいカリキュラム評価と開発の基礎知識」

セミナー2 「看護基礎教育のカリキュラム評価の開発の実際」

一般社団法人日本看護学校協議会会長 池西静江

総括

セミナー1 は、新たなカリキュラム開発のためには、まず現行のカリキュラムの評価から始めることが大切であること、そのカリキュラム評価について評価対象、評価主体、評価基準、評価方法などを学ぶことができた。科目における目標は、学部目標、大学の教育目標との一貫性が求められる。カリキュラム肥大化の予防や重複・欠如ないカリキュラムを設計するためには、学習内容の配列、順序、履修系統図（カリキュラムツリー）等のカリキュラム設計の重要性を再認識することができた。

セミナー2 では、2022 年度導入の指定規則の改正に向けて 2018 年より実施されている看護基礎教育検討会の第 7 回検討会で示された内容が報告された。これからの社会の変化を踏まえたカリキュラム開発（専門職連携学習、領域横断型、健康状態別看護）などこれまでの指定規則通りの教育ではない教育が求められる、柔軟なカリキュラム開発の必要性を感じた。

（4）フィンドレー大学看護短期研修 学生引率および教員研究活動

引率教員：教授 笠井恭子

期間：2019 年 2 月 11 日（月）～28 日（木）

場所：フィンドレー大学（米国オハイオ州）

プログラム概要：

＜参加学生 3 名の主な活動＞

①看護学生との交流：

Nursing Association 所属の看護学生 7 名を対象に日本・福井県・本学について紹介し、さらに病衣、おにぎり食についてプレゼンテーションした。和式寝衣の着せ方やひもの結び方が日本文化と関係が深いことや日本人の主食である米飯が病院でおにぎり食という形態で提供されることを説明し、実演もしたことで大変関心を示してもらえた。一方、アメリカの実情も教えてもらったことから、互いに、文化の違いや文化と看護のつながりを学ぶことができた。

②高齢者施設見学とアクティビティ：

保育園と高齢者施設が一体化した Nursing Home を見学した。アクティビティでは比較的自立度の高い入居高齢者 10 名を対象に、日本文化を楽しく学び身体を動かしてもらうという目的で、書道、紙風船などを実施した。高齢者は終始笑顔で反応が良く身体をよく動かしてくれたことから目的は達成できた。

③小学校でのアクティビティ

小学 2 年生 21 名を対象に日本文化を楽しく学んでもらうという目的で剣道の紹介、日本のクイズ、折り紙などを実施した。剣道の紹介では剣道着を着て実演したのでリアリティのあるプレゼンテーションができた。全員で折り紙でぴょんぴょんカエルを作ったあと、子どもたちはカエルを手におもいおもいに遊びだし、改めて子どものもつ創造力や発想力の豊かさに気づかされた。

④看護の授業に参加：

「フィジカルアセスメント」と「母子看護学」の授業に参加した。授業は少人数で行われていた。学生は予習してくるのが前提であるため、授業中は積極的に教員の質問に答え、自らも教員に質問していた。今後、自身の授業の中に教員と学生双方向の授業スタイルをどのように取り入れていくかを検討していきたい。

<教員による研究教育活動>

①教員の研究成果報告

“The Characteristics of Night Sleep-state of Elderly Residents at Nursing Home and Related Factors by One Year Follow-up Survey” というテーマでこれまでの研究成果をプレゼンテーションし、そのあと、要介護高齢者の睡眠問題と睡眠改善ケアについてディスカッションした。

②今後の国際交流についての話し合い

フィンドレー大学看護教員 1 名、研修担当者 1 名と 2019 年 5 月に本学が受け入れる看護短期研修に向けて話し合った。実施可能なプレゼンテーションやアクティビティ、そのほかの活動、要望等についてディスカッションし研修の方向性を決定した。プログラムを検討・作成する際に盛り込み、充実した研修になるようにしたい。

総括

フィンドレー大学は学生が勉強したり、食事したり、交流したりする場所が多くあり、会館のいくつかは朝早くから夜遅くまで開放されている。このような環境を目の当たりにし学生の居場所を作ることは重要な課題であると実感した。研修に参加した学生は「言葉に頼らないコミュニケーションの大切さ」、「日本とアメリカの文化の違い」、「人々の目標と職業の多様性」について学んだと述べている。そして、この学びを今後の授業や看護学実習で活かしていきたいと意欲を高めている。研修期間中、数回におよぶ英語でのプレゼンテーションやアクティビティをやり遂げた学生の成長ぶりは目を見張るものがあり、これらは何ものにも代えがたい貴重な体験であると実感した。引率教員として、渡航前、研修中、帰国後にわたり学生をサポートするなかで、私自身も新しい発見や多くの学びを得た。みえてきた課題もある。今後、一人でも多くの学生をこの研修に派遣するため、研修で得たものを活かして活動していきたい。

2.4.4.2 社会福祉学科

①2018 年度 F レックス第 9 回 FD 合宿研修会

日時 2018 年 9 月 12 日（水）～13 日（木）

会場 仁愛大学

本学科参加者 北教員（2 日目のみ）

【1 日目】

セッション 1 講演「グループ活動の活動性を高めるために-初年時教育の実践例」

講師 藤田哲也 法政大学文学部教授

セッション 2 参加型ワークショップ「グループ活動を実質化するための手法について考える」

【2 日目】

セッション 3 講演「教育を通じた地域の活性化—地域連携 2.0 について」

講師 藤岡慎二 北陸大学教授・(株) Prima Piguino 代表取締役

概要 教育を通じた地域の活性化(「高校魅力化プロジェクト」)や北陸大学の取組である「地域連携 2.0」についての解説。

セッション3について

講師は教育コンサルティング会社を立ち上げ、「高校魅力化プロジェクト」をきっかけに行政と協力して地域創生事業プロジェクトを展開している会社の代表である。「高校魅力化プロジェクト」とは、少子化・過疎化のなかで統廃合を迫られている高校を活性化し、地元および全国からの入学者を増やして当該地域への人材・人口流入を促すことにつながるプロジェクトで、同社は主にそのプロジェクトの元で設置された公営塾や高校のカリキュラム改革へのノウハウ提供等を行っている。他方、大学教員としては、大学を地域のコンサルタントとして位置付けるためのシステム作りに着手されている。

プロジェクトを手掛けた高校が活性化されていくプロセスを紹介するお話は興味深かったが、大学および大学生と地域の関係づくりについてはまだ道半ばのようであった。しかし、アクティブ・ラーニングの手法で高校の「魅力化」に成功したノウハウから大学が学べるものもあるはずで、大学関係者としては今後ともこうしたプロジェクトに関心を向けていく必要があるそうである。

②2018年度日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催 第48回社会福祉教育セミナー

日時：2018年10月6日、7日

場所：駒澤大学駒澤キャンパス

参加者：今井・奥西・木村・相馬・橋本・吉川・吉村教員

【1日目】

●基調講演

「いま求められるソーシャルワーカーの役割と機能～その『専門』職性を考える～」

講師：井手英策（慶應義塾大学経済学部）

井手英策氏（慶應大学）の基調講演は財政社会学の視点から社会福祉・ソーシャルワークの役割・機能を見直すものであった。これまでの公助（国による制度・政策に基づくサービス提供）の限界が明確になり、地域での共生社会の実現という自助・共助が制度・政策化されつつある。相互扶助は強調されるが、それを引き受ける家族・地域の力は減少し続けている。地域づくり（コミュニティづくり（再生・創造？））が期待される中でソーシャルワーカーは「社会福祉の提供者＝サービスの下請け」から「自由と可能性の担い手」という役割を負うことが期待されていることが述べられた。

●シンポジウム

「ソーシャルワーク教育は誰のためにあるのか～社会福祉士・精神保健福祉士養成カリキュラムの見直しを見据えて～」

コーディネーター：空閑浩人氏（同志社大学）

シンポジスト：渡辺裕一氏、柏木一恵氏、中島康晴氏、湯川智美氏

コメンテーター：井手英策氏（慶應義塾大学）

午前中の井手氏による基調講演を受けて、4名のシンポジストより、現カリキュラムでは社会変革のための内容が不足していることの指摘、地域のニーズを徹底的に考えるソーシャルワーカーの力、そして他者の痛みへの共感力を養い、当事者性に気づき「共に」考えることが今後のソーシャルワーク教育に必要であることが議論された。

●第1分科会

「社会福祉士・精神保健福祉士養成におけるグローバル視点の必要性」

「地球市民のためのソーシャルワーク」をテーマに、龍谷大学短期大学部、関西学院大学、淑徳大学、それぞれの大学における国際社会福祉教育の取り組みと、ソーシャルワーク・教育・社会開発合同世界会議の報告があった。

●第2分科会

「高校における福祉人材育成の取組と高大連携の可能性」

事例発表：清水弘恵教諭（千葉県立松戸向陽高校）、中山見知子教諭（群馬県立伊勢崎興陽高校）

映像紹介：第二回関東地区高校生介護技術コンテストの取組（全国福祉高等学校長空会関東地区校長会）

高校生と大学生の情報交換：

神奈川県立津久井高校、神奈川県立二俣川看護福祉高校、神奈川県立川崎市立川崎高校

桜美林大学、東洋大学、立教大学

行政説明：矢幅 清司氏（文部科学省視学官）

事例発表①清水教諭（千葉県立松戸向陽高校）より介護福祉士国家試験の対策準備について報告があった。3年間 1855 時間で介護福祉士カリキュラム＋高校一般教育を修める。授業時間の確保が大変。7限目を実施することも有り。受験対策についてはかなりの準備をさせる。低学年からの意識付け、専門職意識の醸成、過去問分析、模擬試験。とにかく生徒の合格率を確保することが大事。合格率はコース存続のための生命線？去年は 97%であった。

事例発表②中山見知子教諭（群馬県立伊勢崎興陽高校）より、科目教育の他に、どんどん地域に向かわせて地域貢献活動をさせる。障害者作業所等のボランティア活動をはじめ、障害平等教育（Disability Equality Training:DET）への参加、ガン教育、理容師会との交流、様々な地域プログラムの企画・実施（車イスのアプリによるバリアフリーマップ作りなど）、介護技術コンテスト関東大会での入賞等々、教員が後押し。介護福祉士会からの学校訪問による指導、助言も気軽に受けられる態勢。地域と一緒に生徒を育てること（現場で学べ！）。→大学で社会福祉学部に進学する生徒も。→看護に進む生徒も。

卒業生 10 期となり同窓会の結成。

高校生と大学生の情報交換：その場で男子大学生 4 人（内 1 人は卒業生）が指名されて登壇して開始。高校生に社会福祉の学びを説明することに苦勞していた。

行政説明：矢幅 清司氏（文部科学省視学官）

社会構造の変化、AI 時代、職業の未来予測、新しい学習指導要領、カリキュラム・マネジメントとアクティブ・ラーニング、高大接続改革→大学の入試改革、教科「福祉」改訂、スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）など。

【2日目】

●第5分科会

「ソーシャルワーク専門職としての社会福祉士と精神保健福祉士の関係は？共通項と固有性」
登壇者：石川到寛（大正大学名誉教授 日本ソーシャルワーク教育学校連盟相談役）

山本博之（田園調布学園大学人間福祉学部教授）

中谷陽明（松山大学人文学部教授 日本ソーシャルワーク教育学校連盟相談役）

分科会では、中谷氏が進行役で、石川氏から教育と研究における 40 年の経験から、山本氏からはアメリカでの教育システムとの比較から教育や資格に関する課題が投げかけられた。石川氏からは SWr の共通資格としての社会福祉士、精神保健福祉士の 2 階建構想に置ける養成と認定のシステムとカリキュラムの再編と統合、その中でキャリアパスを示す必要性等を述べられた。また、山本氏は knowledge oriented から skill oriented が求められているのではないかと話された。両名からは専門性がどこまでのスキルでどこまでのレベルか、教育は何をどこまで求めるのかの未整理さが問われていた。

●第 7 分科会

「ソーシャルワークの専門職養成のスーパービジョン」

ソーシャルワーク・スーパービジョンについて、社会福祉士及び精神保健福祉士の両養成課程と卒後研鑽の連動を視野に入れて、現状認識に基づいて必要性や展開の課題について提議された。ソーシャルワーカー養成課程の実習、社会福祉士・認定社会福祉士制度、コーディネーター兼精神保健福祉士、それぞれ異なる立場から方策の検討がなされた。

●緊急企画『ソーシャルワーカー養成教育の見直しの方向性』

白澤政和氏（ソ教連 会長）

平成 30（2018）年 3 月 27 日に社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会より公表された『ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について』報告書以降、社会福祉士の養成カリキュラム改正の議論が始まっているが、改正案については公表されていないのが現状で、昨年度のセミナーで報告された工程の 2020 年度新カリ開始はないとのことであった。そのため、本企画では白澤会長が前回の改正点とその後のソーシャルワーク専門職や相談援助実習内容の変化について説明し、今後はスクールソーシャルワーク分野に社会福祉士または精神保健福祉士を位置づけることを各職能団体と協力しながら要望していくことと、各養成校は既卒者の国試合格率を上げるための工夫が必要であることが話された。

③平成 30 年度 公立大学協会社会福祉学系部会連絡会

日 時：2018 年 11 月 17 日（土）13 時～16 時 40 分

場 所：福井県国際交流会館

本学参加者： 輪倉学科長他 10 名

第 1 部 講演会「ごちゃまぜの地域づくりとソーシャルワーク」

講師 雄谷 良成 氏（社会福祉法人佛子園 理事長）

第 2 部 連絡会

今年度は部会長校として本会を主催し、本学科教員を含め 27 名の参加があった。

第 2 部の連絡会では、カリキュラム評価、アクティブ・ラーニング、実習指導者への対応などの学部教育に関する情報共有と、県外学生募集や学外向け行事の企画に関する各大学の現状について情報交換を行った。

当学科主催 FD 活動

① 平成 30 年度実習関係者会議・合同学習会

日 時：2008 年 8 月 3 日（金）13 時～14 時 45 分

場 所：福井県立大学

参加者：実習指導者・教員計 44 名

講演「実習教育連携の成果を問うー京都児童福祉施設実習教育連絡協議会の取組からー」

講師 黒木 保博 氏（同志社大学社会学部社会福祉学科 教授）

1987 年社会福祉士及び介護福祉士法制定以前より日本社会事業教育学校連盟（現：日本ソーシャルワーク教育学校連盟）事務局や会長の要職を経験された講師を招き、実習教育において重要とされる養成校と実習施設・機関が連携して実習教育内容の充実と職員の実践力向上に取り組んできた京都市内での実践についてご講演いただいた。

②2018 年度社会福祉研究セミナー 貧困と就労支援 ～福井から多角的に考える～

日時：2019 年 3 月 16 日

場所：福井県立大学永平寺キャンパス多目的ホール

参加者（教員含む）65 名

金井郁氏（埼玉大学経済学部准教授）より「働くことへの支援の展開ー求職者支援制度と生活困窮者自立支援制度の位置づけをめぐるー」というタイトルでご講演をいただいた。その後、福井県内の実践者である斉藤正晃氏（坂井市役所福祉総合相談室）、野村昌宏氏（福井県発達障害児者支援センタースクラム福井）、平吹威一郎氏（嶺南障害者就業・生活支援センターひびき）の 3 名それぞれの立場で貧困と就労支援に関する実践報告が行われた。その後、会場を交えて、福井県の現状をふまえて議論を深めた。

2.4.5 授業改善についての課題と展望について

2.4.5.1 看護学科

看護教育で最も比重が大きいのが看護実習である。学生は教員をはじめ、現場の看護師や保健

師などの指導のもと、看護する喜び、難しさを実感する。その一方で無資格の学生が一人の患者を受け持つ実習に対する教員の責任は大きい。座学とは異なる実習指導は学生個々のレディネスに沿った教授方法と、学生の個別的対応を充実させる必要がある。近年、学修不振に陥るものが散見することが多くなっていることから、座学の講義だけではなく、実習関連科目のFD評価のあり方を検討する。

教員へのスキルアップとして看護系大学や看護基礎教育機関等で開催される研修会への若手教員の参加を積極的に進める。

2.4.5.2 社会福祉学科

社会福祉学科のカリキュラムにおいては、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の国家試験受験資格を取得するための指定科目が多く配置されていて、その取得を目的に実習、実習指導等の科目を履修する学生が多くいる。学生は実習で様々な現実と出会い、考え、悩み、揺れる

中で自分の今後の専門職としての姿を創りだしていく。学生一人ひとりが自分の課題に気づき、それらと向き合い解決に向かっていくために、一人ひとりの学生にマッチした環境を教育の中で整えていくことが必要と思われる。学生が今何を必要とし、何を学ぶべきなのかを教員のサポートと一緒に具体的な経験の中で探し、学びを深めていく環境である。しかしながら講義、演習、実習の各科目の関連性について、それをどのように捉え、意味づけし、関連づけていくかということについて全教員間で十分な相互理解・コンセンサスを得るまでにはいたっていない部分があり、学生の学びを深めるための環境づくりという点でも、学科FD活動の大きな課題であると考えている。そこで、2018年度からはカリキュラム検討チームを設置し、今後の改革のための検討を鋭意を行っており、本年度も継続する。

また、近年実習を履修しないで卒業を迎え、社会福祉領域以外への進路を選択する学生も少なからずいる。その学生についても卒業後の進路を見通しながら学士力に相当する基本的な知識・技術、技能を深め、社会福祉学科での学修に興味を持って取り組むことができる意欲を引き出すことが求められる。

学生の中には、周囲の人間関係に過度に敏感になり感情が揺れ動いて、外見の表情からだけではとらえきれないようなストレスを抱える学生もいる。教育の中で学生自身が「聴く力」「考える力」「悩む力」「自己理解力と自己肯定力」「課題解決力」等を学びながら、学生生活をより充実させたものにするための工夫を検討していきたい。

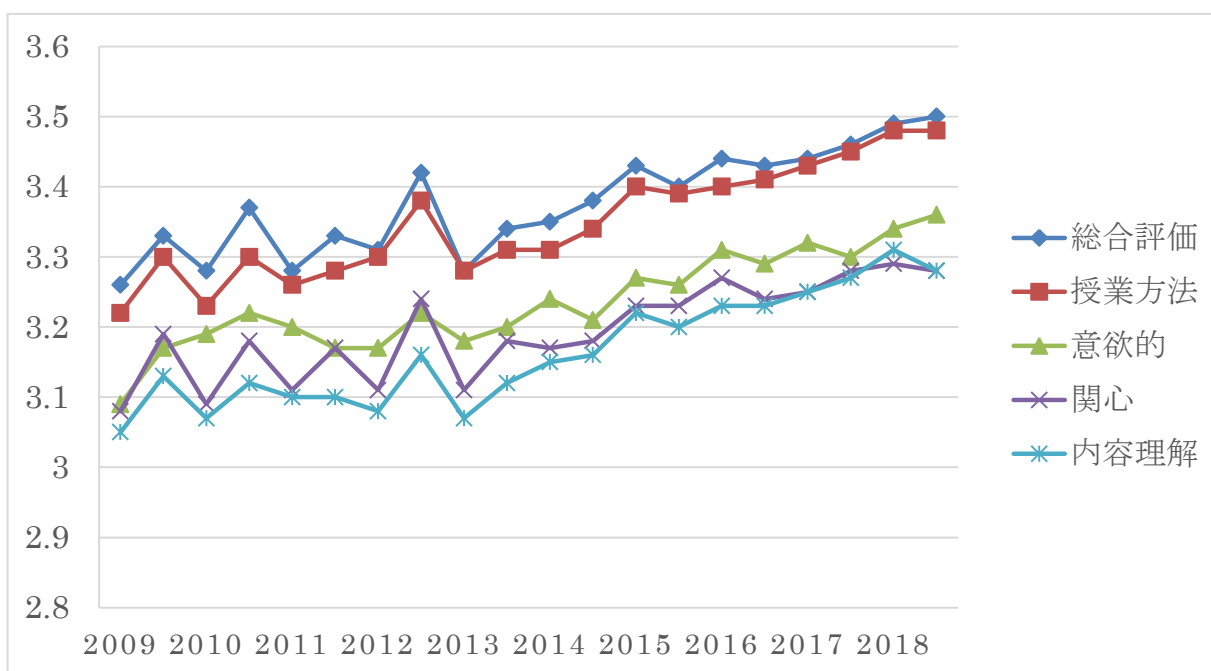
2.5 学術教養センター（加藤まどか）

2.5.1 授業評価アンケートの結果

学部生による授業評価全体集計（部局別）の結果をみると、学術教養センター（以下、学教センターと略）では、今年度もすべての項目において高い水準であった。過去10年間の変化を見ると、全項目で上昇傾向が続いており、今年度・後期には、全項目において、過去10年間で最も高い数値となっている。学教センターの各教員の努力の成果が現れていると考えられる。

2018年度の前期と後期とを比較すると、「内容理解」「関心」の項目で前期より後期の数値が少し下がっている。しかし「総合評価」と「意欲的」の項目では、前期よりも後期の数値が上昇している。特に「意欲的」の項目においては、2014年度以降、後期が前期より低いという傾向が続いていたが、2018年度においては、前期よりも後期の数値が大きく上昇する結果となった。

一般教育	2009		2010		2011		2012		2013		2014		2015		2016		2017		2018	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
意欲的	3.09	3.17	3.19	3.22	3.2	3.17	3.17	3.22	3.18	3.2	3.24	3.21	3.27	3.26	3.31	3.29	3.32	3.3	3.34	3.36
授業方法	3.22	3.3	3.23	3.3	3.26	3.28	3.3	3.38	3.28	3.31	3.31	3.34	3.4	3.39	3.4	3.41	3.43	3.45	3.48	3.48
内容理解	3.05	3.13	3.07	3.12	3.1	3.1	3.08	3.16	3.07	3.12	3.15	3.16	3.22	3.2	3.23	3.23	3.25	3.27	3.31	3.28
関心	3.08	3.19	3.09	3.18	3.11	3.17	3.11	3.24	3.11	3.18	3.17	3.18	3.23	3.23	3.27	3.24	3.25	3.28	3.29	3.28
総合評価	3.26	3.33	3.28	3.37	3.28	3.33	3.31	3.42	3.28	3.34	3.35	3.38	3.43	3.4	3.44	3.43	3.44	3.46	3.49	3.5



2.5.2 授業公開の方針と実績

学教センターでは、授業は常時公開となっているが、近年では個別の授業参観は少なくなっている。しかし以下で述べるように、オムニバス授業の実践により、授業参観が活発に行なわれている。

まず、一昨年度より始まった「教養特講Ⅰ 研究の世界」では、13名の教員（亀田、山川、森、木村、清水、黒田、熊谷、加藤（裕）、中村、石丸、徳野、小林、田中）がオムニバスで授業を行った。とりまとめ役の教員と講義担当者以外に、毎回2名前後の教員が授業を参

観した。授業のあり方に関するやり取りはなかったが、授業の内容について積極的に関わりを持つ教員が多く、大変有意義な交流がなされていた。

次に今年度、あらたなオムニバス講義として「比較文化論」が開講された。この講義は、各教員がそれぞれの専門分野に関連する世界各地の文化について講じ、学生の視野拡大を趣旨とするものである。北村、山川、亀田、加藤(裕)、森、杉村、石丸、石原、松本、中村、サッカ、島田、長岡の計13名が担当した。

教室においては、オーガナイザーの教員が各回の担当教員を紹介し、進行役やインタビューの役割を引き受けるなどして、立体的な授業進行を試みた。毎回2～4名の参観教員があったが、単に参観するだけではなく、適宜意見や質問を発して、学生たちの興味を喚起することに貢献していた。本年度学教センターに新たに赴任した2名の教員は、とりわけ頻繁に授業に参加した。学生たちは毎回熱心に耳を傾けている様子で、授業としては成功したといえるが、オーガナイザーの教員によれば、「そのための準備には通常の授業以上のものが必要であった」とのことである。「授業に投入されるエフォートとその効率性については、今後検討すべきかもしれない」という課題が残された。

また「日本の文化と社会」は、11名の教員によるオムニバス形式(杉村、松本、菊沢、石原、北村、浜本、長岡、田中、熊谷、デンマン、大石)で行われた。毎回2名前後の教員が授業を参観しており、お互いの専門内容を理解する上でもよい機会になったと考えられる

以上にみられるように、オムニバス授業において、各教員が、専攻分野や世代が大きく異なる他の教員の授業ぶりを参観することで、これまでと同様に相互啓発の効果は大きかったものと思われる。

2.5.3 部局内FD研修

今年度は学術教養センター研究会という形での部局内FD研修は実施しなかったが、学教センターの教員が参加者としてかかわった、以下のようなFD研修が実施された

F レックス FD 合宿研修会

日時： 2018年9月12日～13日

場所： 仁愛大学

学教センターからの参加者：山川、徳野

内容：

◎9月12日

講演：グループ活動の活動性を高めるために一初年次教育での実践例

ワークショップ：初年次教育における、効果的なグループ活動について

講演とワークショップの講師：藤田哲也(法政大学)

参加者の感想：

- ・初年次教育の見直しに着手する現場に立ち会っており、カリキュラム面でも、授業の実践面でも大いに役に立つ内容でした。
- ・ミラーリングの話と実習が大変役に立った。
- ・やや時間不足の点が残念でしたが、講義とワークショップがうまくかみ合っていて、勉強になりました。

・後期にグループワークを多く取り入れたゼミを行う予定のため、本日のお話は大変参考になりました。

・学生のグループ討論に応用できる事例が良く理解できました。

・ワークショップについて、もう少し時間があれば良かったと感じました

◎9月13日

講演：教育を通じた地域の活性化-地域連携 2.0 について

講師：藤岡慎二（北陸大学）

参加者の感想：

・地域の企画力・政策力が、地域の存続に関連していることを強く認識しました。教育の充実や魅力向上が地域政策の 1 つであることについて大いに納得しました。

・高校魅力化プロジェクトが大変面白かった。

・取り組みの内容はある程度理解できましたが、大学の中でどう位置付け、大学教員が具体的にどのように関与すれば良いのか、ヒントが得られませんでした（この点について、もう少し時間を取って欲しかった）。

・自分も子供の頃、全校生徒が 30 名程度の小中学校に通学し、地域の方々にインタビューをする機会があり、保護者がたくさんいろんな行事を企画し、スポーツ大会に出場したりと、30 年ほど経った今でも携わった方々の顔が思い出されたりと、郷土愛が育まれたと考えています。学生や地域の子供達が魅力的に感じられる大学になるためのきっかけを高校魅力化プロジェクトの実例を基に参考になりました。

・地域連携活動の多様な事例や本学へのヒントをいただきました。また、それをブランディングにどう結び付けていくかについても興味深いお話をいただきました。もう少し時間があると良かったですね。

・高校教育の変革の事例、とても興味深かったです。

・リテラシーとコンピテンシーの関係は大切だと思います。もう少し詳しく学びたいと思います。

2.5.4 授業改善についての課題と展望

2018 年度には、3 名の教員が、以下のような積極的な授業改善の取り組みを実施している。

・「導入ゼミ（ヨーロッパの歴史と文化）」「教養ゼミ（ヨーロッパの歴史と現代社会）」（松本）

上記のゼミの授業では、大福帳を使って毎回学生とコミュニケーションを図ることを試みた。具体的には、学生に毎回授業の感想や教員への質問を記入してもらい、コメントを付けて返却をした。大福帳では各回について自分が記入したものと教員の返信が一覧になっているため、学生にとっては、授業内容の振り返りが容易になったものと思われる。その結果、従来よりも授業内での学生の発言が活発になり、期末レポートもより授業内容を理解した内容に改善されたと感じられた。

・「中国語Ⅱ」（亀田）

上記の授業において、台湾からの留学生をゲストに迎えて何度か授業を実施した。発音の指導を手伝ってもらったり、授業で教える内容と台湾の実情との比較をしたり、お勧めの中

国語楽曲を紹介してもらったり、発音テストの審査員もしてもらった。学生にとってはよい刺激になったと思われる。来年度からはSA・TA制度が導入され、きちんと報酬も出せるようになったので、今後も継続して活用する予定である。

- ・「教養特講(南米の社会と環境)」(石丸)

上記科目において毎回、小テストと感想文を提出させ、教員からコメントを付して次回授業で返却を行った。授業での疑問点や内容についての学生の視点などについて補足や整理を行うことで、復習に役立ててもらうことを意図した。また、図書館を利用したグループでの調べ学習を取り入れ、最終回では武生市のブラジリアンコミュニティを訪れて発表を行い、ブラジルの社会と環境に対してブラジル人からのコメントを貰う事でより深く理解が進んだとともに、福井県内の多文化共生についても考える機会となった。

- ・「地理学」(石丸)

上記科目において、毎回小テストと感想文を提出させ、教員からコメントを付して次回授業で返却を行った。前後の授業との関連性を意識させたり、疑問点の解消、学生からの授業に対するリクエストなど、きめ細やかな対応が可能になった。また、この小テストと感想文は毎回ストックされて学習ポートフォリオの役割も果たしており、期末レポート作成においては授業全体で自分が何を学んできたかを振り返るための、個別の指南書としても役立ててもらえた。

以上で紹介した事例に限らず、学教センターでは、それぞれの教員により、日々、授業改善の取り組みがなされている。一昨年度の報告書で指摘されたように、授業評価調査に表れる数値は学生の立場からの数値であり、学生の力が客観的に伸びているかどうかを測るものではない。しかし、その数値の変化からは、個々の教員による授業改善が着実に進められていることを、読みとることができるだろう。

以上

ファカルティ・ディベロップメント報告書2018

発行年月 2019年3月

編集・発行 福井県立大学FD部会